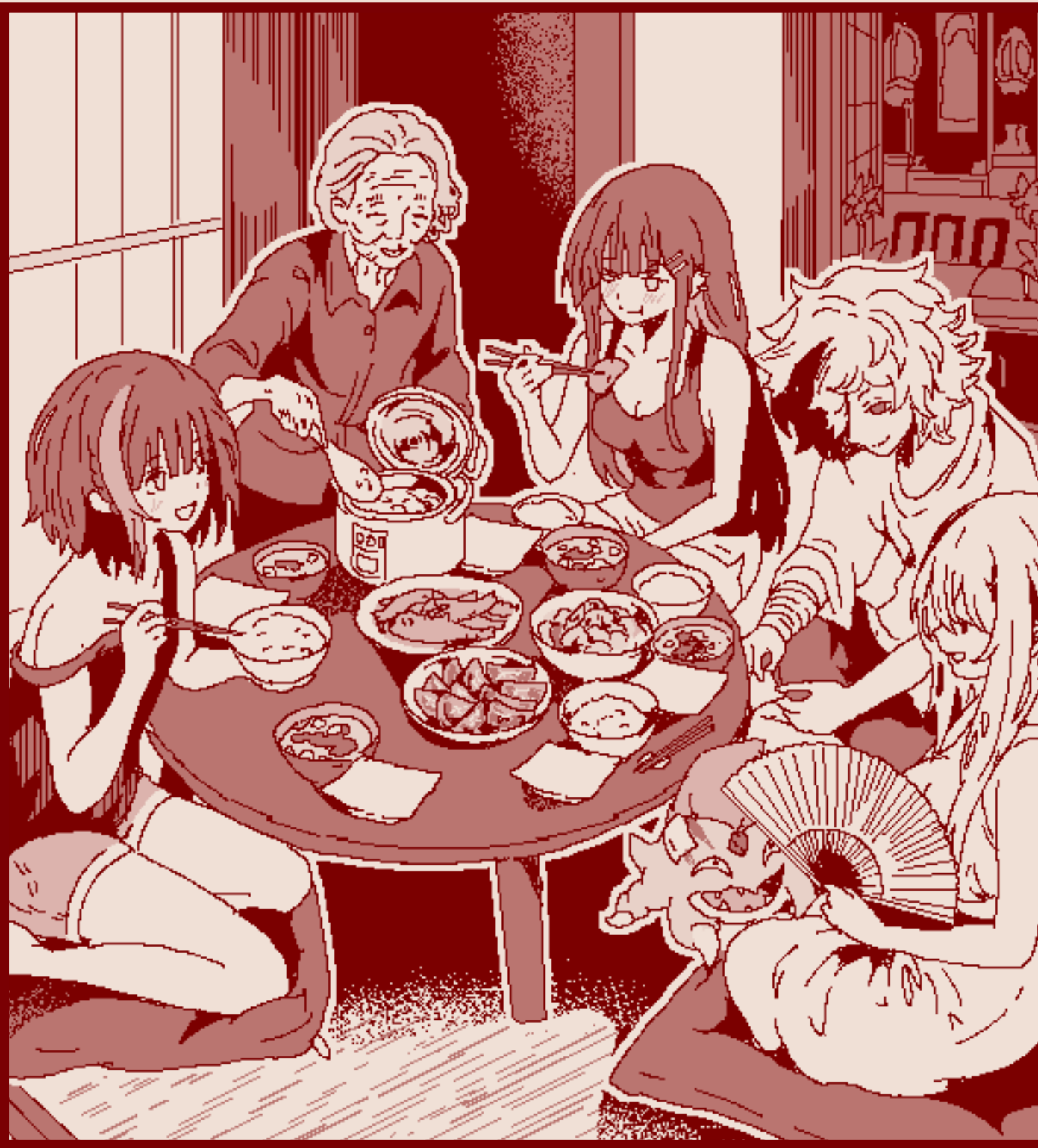




王港町に戻った一行は、日も落ちかけている事もあり遥の家身を寄せた。海沿いの路地の突き当たりにある古い平屋の引き戸を開けると、微かな線香の香りに被い被さるように、むせ返るような日常の生活臭が小都華の鼻腔をくすぐった。「遥…よかった…心配したんやえ。伽夜子さんから事情は聞いたほんまよう戻ってきた。」

台所の奥から小走りで現れた祖母の顔には、安堵の皺が深く刻まれていた。その背後からは、トントンと小気味よい包丁の音が途切れた余韻と、醤油と出汁の焼ける香ばしい匂いが漂ってくる。

居間に通されると、首を振る古い扇風機が「ジーッ」と単調な機械音を立てながら、生温い夜風をかき回していた。開け放たれた縁側の向こうからは、遠くの波音と、庭の植え込みで鳴く虫の声が聞こえる。

ちやぶ台に並べられたのは、生きている人間のための食事だった。

湯気を立てる豆腐とわかめの味噌汁。こんがりとした鰯の煮物。炊きたての白いご飯に、氷水で冷やされた真っ赤なトマト。煮物、蛍光灯の光を受けて瑞々しく輝いている。

蔭洲升の藤宮食堂で見た、あの墨汁のように黒く濁った煮汁と、死してなお粘液のように脈打つ悍ましい肉塊とは対極にある、確かな温度と色彩を持った「生者の食べ物」だった。

「うわ、めっちゃ美味そう！ いただきます！」

「すみませんねえ、寝床だけでなく夕食までご馳走になってしまっ。」

小都華は遠慮する素振りも見せず、両手を合わせてから勢いよく白米を掻き込んだ。鰯の身を箸でほぐし、味噌汁で流し込む。咀嚼するたびに、口の中に広がる確かな塩気と旨味が、恐怖で縮こまっていた胃袋を内側から力強く押し広げていく。

「美味しいわあ。これ、ほんま生き返るやつや」

小都華が口いっぱい頬張りながら言うと、祖母は目を細めて嬉しそうに笑った。

「よう食べる子やなあ。おかわり、お櫃にまだぎょうさんあるえ」

その対面で、遥はまだ半分夢の中にいるような虚ろな瞳で、自分の茶碗を見つめていた。蔭洲升の重い湿気と、両親の声を騙る影に魂を削り取られた疲労が、彼女の輪郭を薄くしている。

だが、食卓の下で「おいハルカ、俺にもその緑の丸いやつ食わせろよ！」と騒ぐベタモンの頭を軽く小突いた後、遥はゆっくりと箸を取った。

「小都ちゃんさん、ほんまよう食べはるなあ…」

呆れたような、それでいてどこか安心したようなおっとりとした声。遥は冷えたトマトを一口齧り、小さく息を吐いた。鮮烈な酸味と甘みが、乾ききっていた口腔の粘膜を潤す

小都華が二杯目のご飯をよそいながら言い放つ。その圧倒的なまでの生命力に当てられるように、遥の箸も少しずつ進み始めた。

遅れて合流した月彦と伽夜子も、食卓の端に座った。月彦は、遥に対して民俗学の小難しい講義をしようとはしなかった。彼は無言で出された味噌汁を一口啜り、椀の縁に白く残った塩の結晶を指先でそっと撫でた。

ベタモンは、月彦に背鰭の傷の手当てを受けながらも、「お姉さん、いい匂いするな。お尻触らせてくれよ」と伽夜子に絡み、「尻以外の話をしたまえ」と扇子で頭を軽く叩かれていた。相変わらずの下品な軽口が、張り詰めていた食卓の空気を弛緩させ、小さな笑いを引き出す。



夕食後、祖母が押し入れの奥から古い紙袋を取り出してきた。

「昔、遥が好きやったやつや。まだ湿気てへんやろか。」

袋の中には、色褪せた花火の束が入っていた。

小都華が「やるやる!」と乗り気になり、遥も渋々といった様子で縁側へと引っ張り出される。伽夜子も、少し離れた庭の隅からその様子を見守っていた。

庭先には湿った土の匂いと、渦巻き型の蚊取り線香から立ち昇る煙の匂いが混ざり合っていた。遠くから聞こえる波の音が、不意にあの暗い鉛色の海を連想させ、遥の背筋を冷たい手で撫で上げる。

だが、小都華がチャッカマンで点火した手持ち花火が、シュバッという音と共に激しい火花を散らした瞬間、その暗い想像は光の暴力によって断ち切られた。

「ほれ、遥さんも持ちいな!」

火薬の焦げる強烈な匂いと、煙の煙たさ。夜の闇を食い破るように燃える小さな火が、海の気配を遠ざける確かな境界線となっていた。

「熱っ、ちょ、小都華、俺の近くで振り回すなよ!」

「小都ちゃんさん駄目ですよ…。」

火を怖がって逃げ回るベタモンを笑いながら、小都華は「こっちは湿っぽい海じゃなくて、ちゃんと燃える火やで」と得意げに言う。

やがて、手持ち花火が尽き、最後に残った数本の線香花火に火が灯された。

チリチリと控えめな音を立てて火球が育ち、松葉のような繊細な火花が四方へ散る。二人は縁側に並んで座り、火が落ちないようにじっと息を潜めた。

虫の声だけが響く静寂の中、遥がぼつりとこぼす。

「…ウチ、昔はこういうの好きやったんよ」

それは、海で両親を失う前の、純粋な子供としての記憶だった。

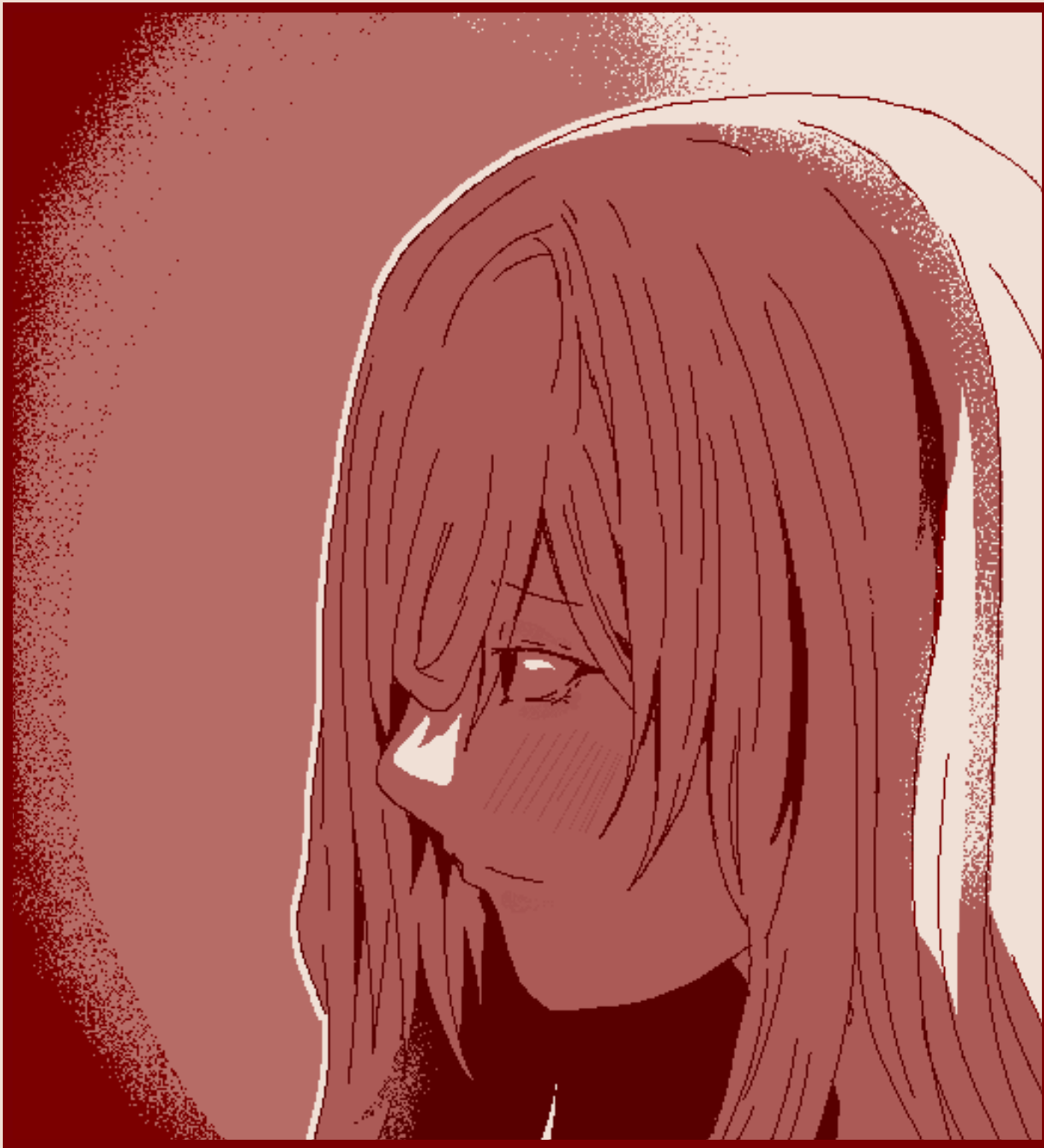
小都華は深掘りすることなく、ただ花火の火先から目を離さずに返した。

「今も好きでええやん。誰に遠慮するん」

ぼとり、と。

赤い火球が寿命を迎え、バケツの水へ落ちてジュッと短く鳴った。

遥は暗くなった庭を見つめたまま、微かに唇を噛み締めた。その横顔には、喪失の影に覆い隠されていた、年相応の瑞々しさがほんのわずかに戻っていた。



「久々にあん子が笑ってるのに見ました…。ほんま伽夜子さん達に頭が上がりませんわ…。」

遥の祖母が嬉しそうにぼつりと漏らした。

もちろんこれまでも遥は祖母の前で笑顔を見せていたがどこか遠慮がちなものであった。

それを今まで双方口には出さなかったが暗黙のうちに両者の共通に認識となっていた。

「いえいえ…私なんてなにも…お孫さんを助け出したのも…そう笑っているとも思われるならそれも小都ちゃんのおかげですよ。」

「はぁ…あの子が。」

「あの子と接していればお孫さんもきっともう海に呼ばれ事もないでしょう。」

「…。」

「すみません…貴方を責めるつもりなんてないんです。」

ただ、あの子は特別なんです…生きていればどこか人間には死を受け入れてしまう悪癖があります…でも、あの子は自分でも他人でも生きる事になんの疑問も持っていない。

幾ら闇を見ようともこの世の光を信じ、それに身を任せられる太陽のような子なんです。

私事ですが、私達にも両親はいません…弟と再会できたのもほんの数年前ですし…その間に私も弟も色々とありすぎた…私達では死がこびりつきすぎている。

でも、あの子といるとどこか諦めているこの世界で生きててもいいと信じれるんです。

きっとお孫さんもあの子といれば…。」

「あん子が…。」

「ええ…。」

「失礼ですが…ほんまに？」

「？」

遥の祖母の言葉を受け、伽夜子が小都華の方を見ると口と耳にまで花火を咥え大笑いしながら月彦を追いかけていた。

それを見て遥が苦しくなる程腹を抱え笑い膝をついていた。

「…まああの様子じゃあ、信じれねえと言うか、教育に悪そうだもんなぁ…。」

黙って聞いていたブシアグモンが呆れた顔でため息交じりで呟いた。

「小都ちゃ～ん！お姉さん今すっごいい話してるからちょっと落ち着こうか～！」



花火の煙と汗の匂いを落とすため、祖母に促されて二人は風呂へ入ることになった。

「小都ちゃんさん、一緒にええの？」

脱衣所で遥が尋ねると、小都華は「女同士なんやし、銭湯みたいなもんやろ」と平気な顔をしてTシャツを脱ぎ捨てた。

浴室には、むせ返るような温かい湯気がもうもうと立ち込めていた。曇った鏡、水滴がタイルを伝い落ちる音、プラスチックの洗面器が床に当たる軽い甲高い音。外の波音は完全に遮断され、家の中の密閉された生活音だけが響いている。

狭い洗い場で並んでシャワーを浴びる。湯気をまとった十代の少女達の裸体は、対照的な美しさを持っていた。小都華の身体は、日々の神社の仕事や活発な性格を反映した、健康的で引き締まった筋肉のラインが腹部や太腿にうっすらと浮かんでいる。対して遥の身体は、日光を浴びていない白磁のように滑らかで、鎖骨や肩甲骨の線がひどく細く、頼りなげだった。それでいて、胸元には女性特有の柔らかく豊かな膨らみがあり、小都華は泡立つスポンジを握りながら、無意識のうちに自分のそれと見比べて少しだけ口を尖らせた。

「遥さん、そのインナーカラーの色、めっちゃ綺麗な。似おうてるわ」

湯船に浸かり、首までお湯に沈めながら小都華が言うと、遥は「そう？」と目を細めて笑った。

「小都ちゃんさんこそ、月彦はんと仲ええんやね」

「なっ、なんでそこで月彦が出てくるんですか！ 違いますし！ いや、嫌いとかやなくて！」

小都華が過剰に反応して湯船の湯をバシャッと跳ねさせる。その分かりやすい動揺に、遥は濡れた黒髪をかき上げ、隠すことなく口角を上げた。ギザギザの鯊歯が、湯気の中で妖しく覗く。「ふふ。顔に全部出る人、ええなあ。見てて飽きひんわ。」

「遥さん、わりと意地悪やな!？」

「ウチ、腹黒いってよう言われるんよ～自覚もあるし？」

おっとりとした口調のまま、さらりと言ってのける遥に、小都華は呆れたように息を吐いた。ただの可哀想な被害者ではない。彼女の中にあるしたたかさと、年相応の刺々しさが、小都華にはむしろ心地よかった。

だが、湯船の表面で白く揺らぐ湯気がふっと晴れた瞬間、遥の横顔に深い影が落ちた。

「…ウチは、誰かを好きになるとか、そういう普通のこと、まだ残っとるんかな。」

自分だけが生き残ってしまった罪悪感。あの暗い海への自罰的な執着。それらを内臓のように抱え込んだ自分が、こんな風に普通の青春を享受する資格などあるのだろうかという、深い諦念。

しかし、小都華は即座に言い放った。

「残っとるに決まってるやろ。資格試験ちゃうねんから、誰の許可もいらんわ。」

雑で、乱暴で、けれど絶対的な肯定。

遥は目を瞬かせ、やがて困ったように眉を下げて笑った。

「小都ちゃんさん、言い方雑やけど、たまにすごい優しいな。」

「たまに言うな。常時や、常時。」

小都華は照れ隠しで顔の半分を湯に沈め、ぶくぶくと泡を立てた。

「…今度は、こんなんやなくて、普通に遊びに来るわ。」

「ふふ。それ、約束やで。」

湯気の向こうで交わされた他愛のない約束。それが、どれほど脆い氷の上に成り立っているかを、二人はまだ完全に理解してはいなかった。

風呂から上がり、バスタオル一枚で脱衣所に出た時のことだった。

祖母の家の脱衣所は、オレンジ色の温かい白熱球に照らされている。それなのに。

——ぞくり。

不意に、濡れた素肌の産毛が総毛立つような、異常な冷気が足元を舐め上げた。

小都華が反射的に顔を上げる。

曇った鏡の奥。そこにはバスタオルで身体を拭く自分と遥の姿が映っているはずだった。

だが、鏡の表面の結露が、不自然な形で丸く、いくつも剥がれ落ちていた。

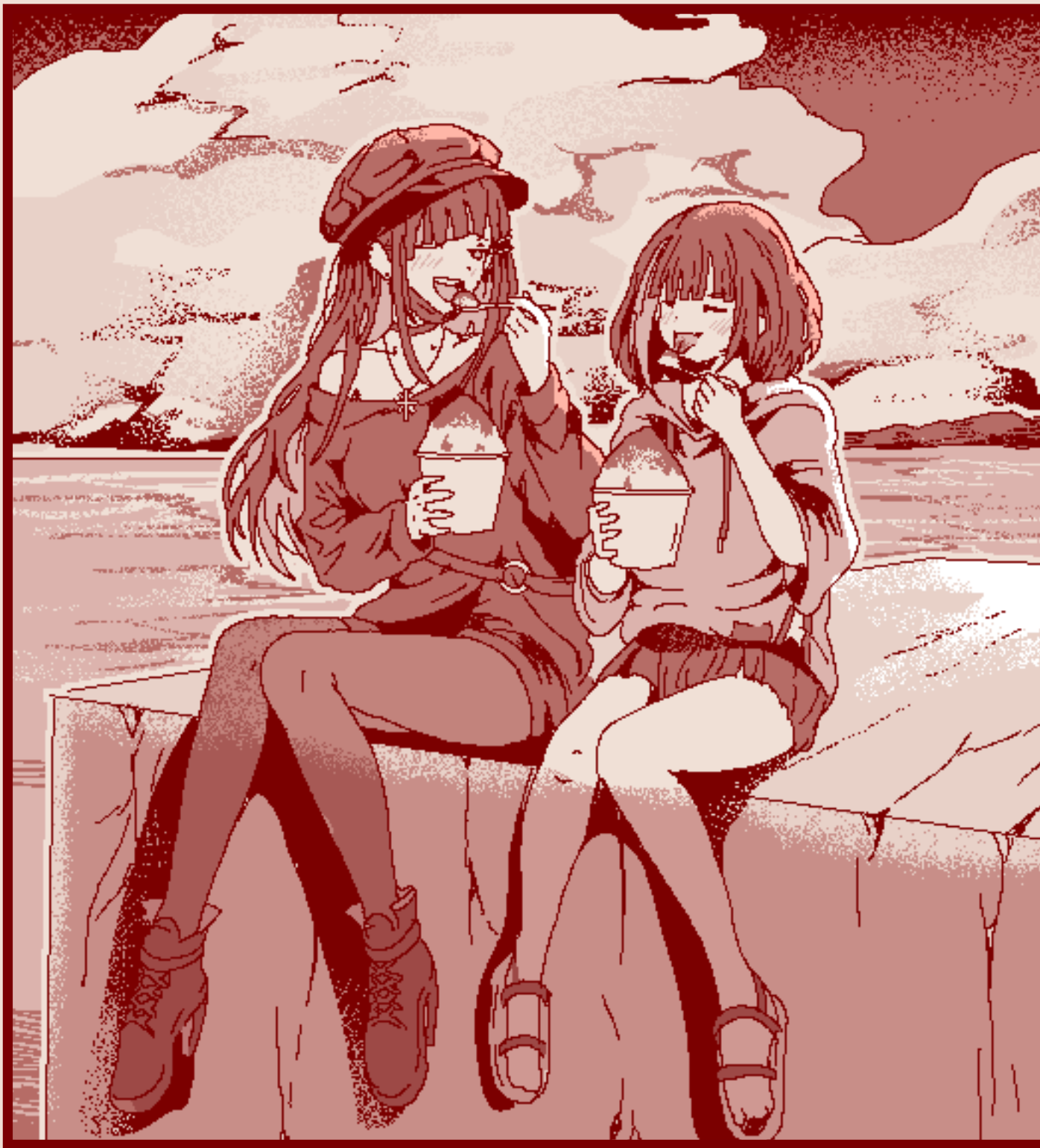
まるで、無数の巨大な深海魚の眼球が、鏡の内側からこちらを覗き込んでいるかのような、不気味な魚眼の斑点。

窓の外は庭のはずなのに、すりガラスの向こう側に、一瞬だけ、海へ口を開けた黒い舟屋の暗闇が重なって見えた…ような気がした。

(…気のせいかな…ウチも気持ちいいやなあ…伽夜子さんが大丈夫言ってるんや。大丈夫やろ。)



「しばらく残るんか!ほんま!?!」
「ふふ、愛しの弟が気になる事があるってしばらく調べたいんだってさ。
ああ宿は遥君のおばあ様のに幾らか包んで一週間ばかりお邪魔させてもらう事になってねえ。」
「うちもおばあちゃんも別にタダでも良かったのに。」
「そういつて貰えるとありがたいけどねえ…そうはいかないさ。こういったとこはしっかりしないとそれこそ失礼にあたるからねえ…1週間程かなあ。」
「ええやん!みんなで遊び行こや!」
「小都ちゃん調査ですって…。」
(それに…遥君と小都ちゃんも一緒にいればだいぶメンタルへの影響もいだろうしねえ…小都ちゃんセラピー様々だねえ。)
「安心したまえ!その分小都ちゃんとの神主達にたっぷり搾り取るからねえぐへへ…!!」
赤牟市の市立図書館は、外の暴力的なまでの真夏の熱気を完全に遮断した、冷ややかで静寂な空間だった。
カビと古いインクの匂いが漂う郷土史コーナーの奥深く。
重厚なマホガニーの机に陣取った月彦は、文字通り資料の山に埋もれていた。
丹後風土記の写本、明治期の海難事故の記録簿、そして埃を被った宗教民俗学の専門書。彼の猫背はさらに深く丸まり、薄く青みがかった白髪 of 天然パーマを無造作に掻き毟りながら、ノートにびっしりと細かい文字を書き連ねていた。
「…月彦」
不意に、彼の視界の端から伸びてきた健康的な白い指先が、開かれた古文書のど真ん中に「ピタッ」と何かを貼り付けた。
蛍光ピンク色の付箋だった。
「…ことちゃんさん。」
身を乗り出した小都華が、呆れたような、しかしどこか悪戯っぽい笑みを浮かべて彼を見下ろしていた。
「もうええやろ～月彦。頭から煙出るで～」
小都華はそう言う、今度は二枚目の付箋を、月彦のフワフワとした白髪の頭頂部にペタリと貼り付けた。
「あ、あの…小都華さん、ここは図書館で…」
「わあーっとるわ。せやから小声で言うてんねん。ばっちゃんに一週間もお世話になるんやから、息抜きも大事やろ？」
ずっとそんなカビ臭い本と睨めっこしてたら、それこそあの変なバケモノどもに食いわれてまうで」
小都華の指先が、月彦の頭に貼った付箋をツンツンと弾く。
抵抗するふりをしながら、心の底では彼女の明るい暴力に振り回されることを心地よく感じている自分を、月彦は否定できなかった。
「…ふふっ。お姉ちゃんは、あんな風に引っ張ってくれるお嫁さんが来てくれたら安心だねえ。」
まるで良質な喜劇でも観るかのよう楽しんでる。
「ほんま、小都ちゃんさんってば月彦はんのこと大好きやねえ。」
「ちやいまずよ遥さん! ウチはただ、このモヤシが干からびへんように世話しとるだけです～」
「…分かりました。キリのいいところまで読めたので、少し外の空気を吸いましょうか」
月彦が頭の付箋を苦笑しながら剥がすと、小都華は「よし、言質取ったで!」とばかりに彼の腕を掴み、半ば引きずりながら図書館の出口へと向かった。
図書館の外へ出ると、暴力的なまでの真夏の日差しと、けたたましい蝉時雨が一行を包み込んだ。赤牟市の海沿いの公園。王港町の中心部から少し離れたこの場所は、観光客と地元の子どもたちで賑わい、生きている人間のエネルギーが満ち溢れていた。
「ほれ、ハルカ! 俺の分のアイスキャンディーはどうした!」
公園のベンチで、緑色の両生類のようなデジモン・ベタモンが、短い手足をバタバタさせて遥に催促している。
「もう、せわしないなあ。はい、ソーダ味やで。頭キーンってならんようにゆっくり食べや」
遥が袋から取り出した青いアイスキャンディーを差し出すと、ベタモンは「おう!」と大口を開けてそれに噛みついた。直後、「ギエェッ! 頭いてえ!」と地面を駆け回るベタモンの姿に、遥はお腹を抱えて笑い転げた。
少し離れた木陰では、コヅキガールモンが寝そべり、小都華がその柔らかくひんやりとした白い毛並みに顔を埋めて涼を取っていた。
「あー、コヅキガールモンめっちゃ冷やこくて気持ちええわあ……天国や…」
小都華がそう呟くと、彼女のパーカーの首元から、白い管狐のようなクダモンが「アタシのほうが気持ちいいし!」と対抗するように顔を出し、小都華の汗ばんだ谷間に身を擦り寄せた。
「ちょ、くすぐったいわクダモン! こら、変なとこ入んな!」
「若いもんは元気がええのう。ワシみたいな年寄りには、この日差しはちと堪えるわい」
伽夜子の隣で、刀を背負ったブシアグモンが、どこから調達したのか冷えたラムネの瓶を傾けながら、親戚のオッサンのような口調でボヤいた。



1週間後…。

月彦と伽夜子が、侵食の痕跡を追い、王港町側の結界の補強と情報収集へと向かう間、小都華と遥は、波止場へと出ていた。

この日は、調子の悪いベタモンは家に残り朝から伽夜子と月彦は王港町の資料館へ向かった。コンクリートの堤防に座り、強烈な太陽の光を浴びていても、昨夜の風呂場で感じたあの「測られる」感触が、薄皮一枚の下にべったりと張り付いて離れない。

商店街の隅にある、波止場に面した小さな食堂の前のベンチ。二人は日差しを避けるように、錆びたトタン屋根の影に入っていた。

「ほれ、食うか？」

小都華が差し出したのは、近くの屋台で買った二つの巨大なかき氷と、ガラス瓶に入ったラムネ、そして醤油の焦げる暴力的な匂いを放つ焼きとうもろこしだった。

蔭洲升で出されたあの醜悪な魚料理とは対極にある、色彩豊かで、匂いだけでも胃袋を刺激する、生きている世界の鮮烈な食べ物だ。

「…小都ちゃんさん、どんだけ食うねん。」

一昨日もカラオケ行ったらサイドメニューめっちゃ頼んでたやん。」

遥が黒いマスクを顎までずらし、少しだけ呆れたように目を細める。

「うるさいな、腹減って死にそうやねん！ ブルーハワイやけどええか？ あっ知ってん？ かき氷のシロップってみんな同じ味なんやで」

「ふふ…そんなん小学生でも知ってるんよ」

小都華は強引にかき氷のプラスチック容器を遥の手に押し付けた。

遥は冷たい容器の感触に少し驚いたようだったが、やがて薄いスプーンを手に取り、真っ青な氷をすくって口へ運んだ。

シャリッ、という心地よい音と共に、冷たさと強烈な甘さが口の中に広がる。

遥の青い瞳が、わずかに揺れた。

舌の先が人工的な青色に染まるのを見て、小都華が「なんやそれ、ゾンビみたいやで」と指差して笑う。遥も、自分の青くなった舌を出して少しだけ笑い返した。

次にラムネの瓶を開けようとしたが、遥はガラスの玉を押し込むのに手こずり、小都華に「貸してみ」とあっさり奪われてしまった。

「うわ、とうもろこし熱っ！」

小都華が焼きとうもろこしに豪快にかぶりつこうとして、予想以上の熱さに耐えかねて手を滑らせ、地面の砂埃の中へ落としてしまう。

「あーっ！ ウチのとうもろこしが!!」

本気で絶望したように顔を歪める小都華を見て、遥はついに、声を出して笑い出した。

それは、蔭洲升の霧の中では絶対に見せなかった、年相応の少女の無防備で柔らかな笑い顔だった。

小都華は、その遥の顔を、そして彼女が青いかき氷を食べ、ラムネのビー玉に悪戦苦闘し、とうもろこしを落として自分がどれだけ悔しがったかを、心の中にしっかりと刻み込んだ。

これらは全て、遥が「今日、確かにここで生きていた」という決定的な記憶になる。あの暗い海の底で、死者の声に引きずり込まれそうになった時、彼女を引き戻すための、強烈な「生者の匂い」として。

しかし、同時に遥は自身の足元の海に黒いものがある事に…「死の臭い」がこびりついてる事に気付いた。



小都華も、その静かな侵食には気づいていなかった。

「…ウチな、両親を海で亡くしたんよ。」

「…。」

小都華もどこかその事には勘付いていた…というか家の仏壇の写真、会話の端々にもそれを感じていた。

恐らくそれが遥に感じた影の正体…。

ぼつりと、ラムネの瓶の滑らかなガラスの表面を指先でなぞりながら、遥が口を開いた。

その声は、先ほどまで小都華の不器用な振る舞いに笑いをこぼしていた少女のものとは別人のように、ひどく平板で、温度を失っていた。

「合宿で、ウチだけ家を空けとった時にな。事故やって言われた。お父さんも、お母さんも、冷たい海の中に沈んでもうて…ウチだけが残ったんや…。」

小都華は、プラスチックの匙を持った手を止めた。

頭上では蝉時雨が鼓膜を打つように鳴り響いているのに、遥の周囲だけが真空のガラスケースに覆われたように、決定的な沈黙が落ちていた。

「それからずっと、ウチだけが生き残った意味って、なんやったんやろって、そればかり考えて生きてきたんよ。毎日、食卓にはおばあちゃんとウチの二人だけ。おばあちゃんは優しくしてくれるけど、ウチを見るたびに、死んだ両親のこと思い出して悲しそうな顔するねん。」

遥の青い瞳が、足元のコンクリートの照り返しを見つめたまま焦点を失っていく。マスクの下の呼吸が、わずかに浅くなった。

「ほんとは海なんて大嫌いなんや。」

お父さん達を奪った海なんか…二度と見たくないって思うとるのに…気がついたら、毎日海岸に立って、あの暗い水面ばかり見つめとる。ウチが残った意味って、何なんやろな。ほんまは、ウチもあの時、一緒に沈むべきやったん違うかなって」

自らを薄く削り取るような、泥のように重い自罰の言葉だった。

小都華は溶けかけた青い氷を見つめ、何と声をかけるべきか迷った。安っぽい同情や慰めの言葉は、この深く冷たい喪失の穴の前では、あまりにも無力で白々しく感じられた。

小都華が膝の上に置いた拳を握り締め、口を開きかけた、その瞬間だった。

視界の端が、白く濁った。

それは、海からの潮霧が風に乗って流れてきたというような自然現象ではなかった。つい数秒前まで肌を焼いていた夏の熱気が、見えない刃で断ち切られたように急激に失われる。代わりに、古い冷蔵庫の底のような、骨の髄まで冷え切る湿気が足元から這い上がってきた。

耳鳴りのように響いていた蝉の声が、一つ、また一つと不自然に途切れていく。

鼻腔を満たしたのは、焼きとうもろこしの香ばしい匂いでも、海の爽やかな潮風でもない。炎天下で腐敗した大量の海藻と、内臓を抜かれた魚の残骸が放つ、むせ返るような鉄と塩の入り混じった悪臭。

「なんや……これ」

小都華が立ち上がった時、波止場の風景はすでに輪郭を失い始めていた。突き抜けるような青空も、眩しい海も、コンクリートの堤防も、すべてが極度に圧縮された灰色の霧によって上書きされ、塗り潰されていく。

王港町の明るい夏が、音を立てて剥がれ落ちた。



見えないはずの暗い海が、巨大な胃袋をうねらせるような重い水音を立て始めた。獣の咆哮のような嗚咽のような不快な音を立てるサイレンが鳴り響いた。

霧の奥から、ゆらりと二つの人影が滲み出してくる。

足音はなかった。ただ、空間の隙間から染み出すように、その影はゆっくりと遥と小都華の前に立ち塞がった。

「…お父さん？ お母さん？」

遥の口から、掠れた声が漏れた。

影の輪郭は酷く曖昧で、顔のパーツは水に濡れた水彩画のように溶けていたが、その背格好と、どこか懐かしい衣服の気配は、遥の記憶に焼き付いている両親のものそのものだった。

小都華の足元で、クダモンが白い毛を逆立て、低い警戒の唸り声を上げる。

『…遥。可哀想な、遥。』

影の一つが、口とも呼べない黒い裂け目を歪ませて声を発した。

それは、優しい母親の声音を模していた。しかし、発音の端々に水中の気泡が弾けるような異音が混じり、何よりその声には、生きている人間の声帯が震える物理的な響きが全く欠落していた。

『一人だけ残されて、辛かったねえ。お前がいないから、家族が揃わないのよ』

『お前だけが温かいご飯を食べて、おばあちゃんに心配をかけて…悪い子だ。お前が乙女となれば…誰も悲しまなかったのに。』

父親の姿をした影が、冷酷に言葉を重ねる。

それは、両親の言葉ではなかった。

「あ…う、ああ…」

遥の身体が、操り人形のようにぐらりと揺れた。マスクの下から浅い過呼吸の音が漏れる。青い瞳から完全に光が消え、深い虚無の底へと引きずり込まれ、海へと歩き出した。

静寂と狂気の入り混じる空間を、小都華の怒声が物理的な質量を持って引き裂いた。

小都華は遥の前に進み出ると、影たちを鋭く睨みつけた。

「アホか!!!親が自分の娘に、こんなじめじめした気味の悪いこと言うわけないやろが!」

小都華の全身から、抑えきれない怒りが立ち昇っていた。

「遥さんの罪悪感に漬け込んでるだけやろ…!!!遥さんもこんな親の声をパクって騙しとるだけや!何従ってん!!!」

『死は永遠の孤独…だっ…た…。

舟に乗り…深き海…か…ら現世に…。』

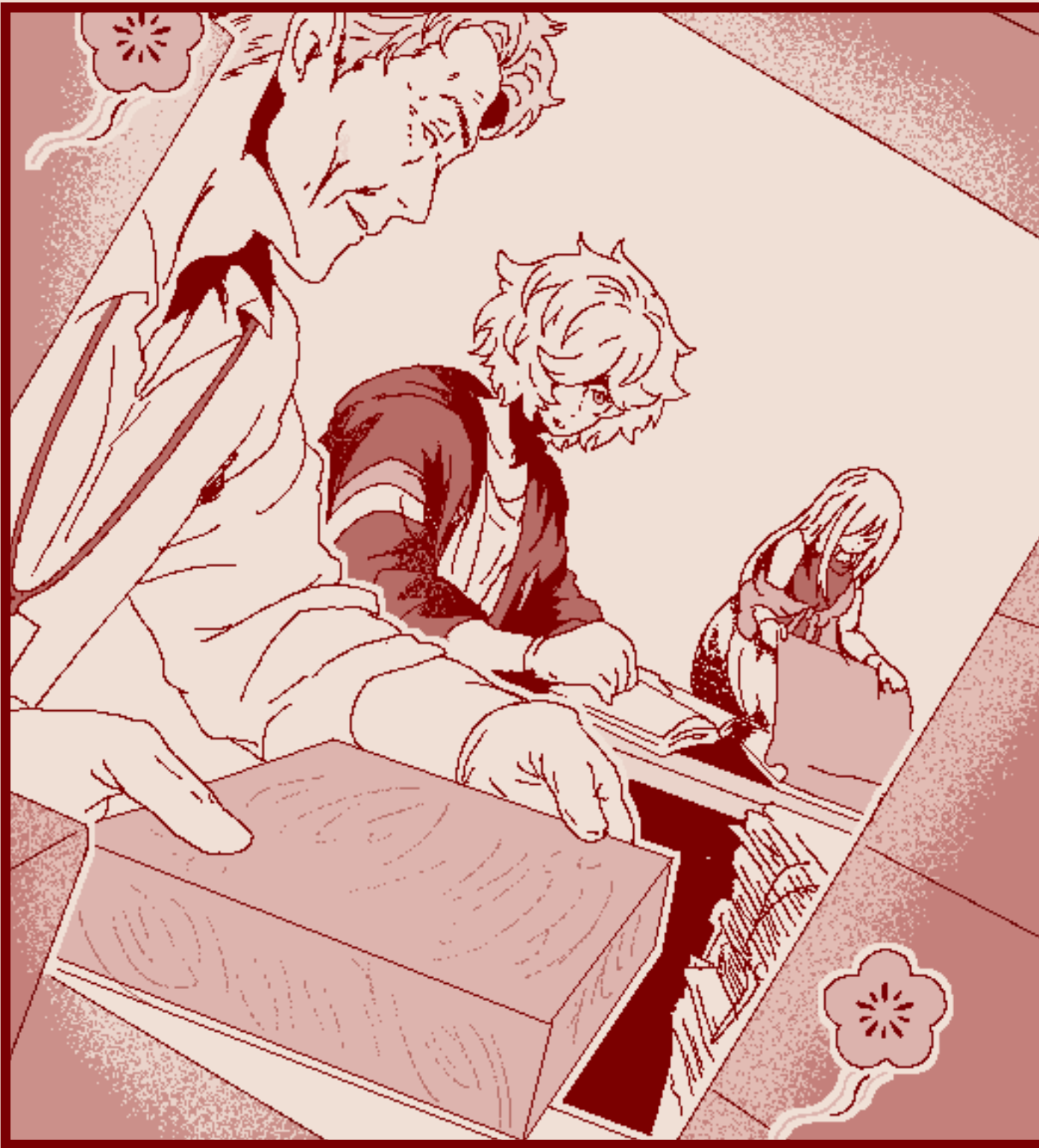
『憐れなる墮子達に…救いを…呪いと海に底はなく…陀金の情けを…おあ、深く大いなる陀金よ。』

小都華の言葉など最初から聞こえていないかのように、影たちは虚ろな言葉を繰り返す。「遥さん!!!!!!!」

小都華の叫びもサイレンの音に小さく萎められていった。



遥が蔭洲升の住民へ向かう遥が小都華の方を振り向いた
「ごめん…小都ちゃん…本当は全部…全部あの時思い出したん…。」
「はぁ!!!??何言って!!!」
「蔭洲升の資料館で…写真…あれ全部ウチだったん…忘れようとしてた…ウチは蔭洲升で生まれてあの日…乙女として町に帰るはずやったんや…なのに…ウチは嫌でそれを拒否した…だから陀金様にお父さん達が代わりに連れてかれたんや…。」
「なっ!?!」
「…小都ちゃんこの一週間楽しかったよ…でも、駄目なんよ…。
ずっとおとうさん達の声が頭から離れない…潮の臭いも…波の音も…あそこから逃げたと思ってたけど…でも…運命が取り立てに來たあの日の借りを返せて…。」
「…!クダモン!!!!」
クダモンが小都華の影から飛び出そうとした瞬間、小都華共々体にあのノイズのような黒い文様が海から上がり身体を侵食していた。
「な…これコトカ…体に力が…。」
「なんでや…進化させられない…体が重い…。」
耐え切れず体がどんどんと海に沈んでいく。
「駄目や…!行っちゃ…!!!アレが本当に遥さんのおとんとおかんと思ってるんか…!!!!」
「関係ないんだよ…小都ちゃん…ただ…ウチはもう…耐えられんのや…。」
「…遥さん!!!!!!」
サイレンのけたたましい音と共に霧と一緒に雨も降りだし、小都華と遥に深い境ができていた。



窓の外では、つい先刻まで舗装路に熱を蓄えさせていた暴力的なまでの夏の日差しが唐突に遮られ、分厚い鉛色の雲から大粒の雨が叩きつけている。

熱されたアスファルトに冷たい水滴が打ち据えられることで、白い水蒸気が地表から立ち昇っていた。それが海から吹き込んだ湿気と混ざり合い、視界の底を這うような低い霧を作り出している。

雨に濡れた土とアスファルト特有の匂い。軒樋を激しく水が流れ落ちる音。入口のガラス戸が開き、雨宿りに駆け込んだ観光客が傘の滴を払う音が、微かに館内の静寂を揺らす。

古紙の酸化した匂い、防虫剤の樟脳の香り、床に塗られた蜜蝋、年季の入った木箱、そして事務室の奥から漂ってくる職員がいたれた緑茶の匂い。

月彦は、展示ケースのガラスに額が触れんばかりに身を乗り出し、薄く青みがかった白髪の天然パーマを無造作に掻きながら、ノートに細かい文字を書き連ねていた。

「ほほう、君は旧字体が読めるのか。それに漁法の変遷にも明るい。高校生の自主研究にしては、ずいぶんと本格的だね」

月彦の背後から声をかけたのは、糊のよく利いた白の開襟シャツを着た初老の男だった。

王港町資料館の館長、瀬戸 内宗一郎である。彼は理知的な光を宿した、誠実な実務家としての空気を纏っていた。「あ、いえ…えっと、少し、そういう昔の記録に…興味がありまして。」

月彦は姿勢を戻し、微かな吃音を交えながら会釈した。彼が宗一郎に伝えているのは、「王港町の高難史や小聖具の来歴を調べたい」という表向きの理由だけだ。

デジモンの存在も、小都華と遙が過去に薩洲升へ引きずり込まれた事実も、一切口にしていない。

「良いことだ。歴史というものは、飾られた神話よりも、日々のささやかな記録の中にこそ本質が眠っているものだからね」宗一郎の案内する展示品には、薩洲升にあった不気味なほどの完成された一貫性はなかった。

展示された漁具や網には、人間の手脂が染み込み、修繕のために不格好に継ぎ接ぎされた糸の跡や、潮風で白くこびりついた塩の結晶が残っている。

それらが間違いなく生きた人間によって使われていたという事実を、物言わぬ傷や擦り減った持ち手の痕が証明していた。キャプションには、寄贈者、採集地、用途が明確に記され、同時に「伝承による年代未詳、後補の可能性あり」といった不確かな注記も隠されることなく掲示されている。

部屋の中央に置かれた舟屋の模型も同様だった。二階には畳が敷かれ、小さな茶碗や囲炉裏の意匠があり、一階には実際に海へ繰り出すための小舟と櫂が機能的に収まっている。

海へ向かって暗く口を開け、濡れた白布と得体の知れない黒い小舟だけが吊るされていた。

「館長さん。あの…この町の高難記録も、見せていただけますか」

「ああ、構わないよ。だが、あまり気分の良いものではないかもしれないがね。」

高難台帳の複製が開かれる。氏名、年齢、舟の屋号、遭難時の天候、捜索日数、そして遺体発見の有無という、不格好な事実の羅列だった。

月彦がノートの頁を繰る中、少し離れた場所で展示を眺めていた伽夜子が、ふと足を止めた。

彼女はいつものように芝居がかった余裕のある笑みを浮かべ、扇子で口元を隠していた。

その視線の先にあるのは、小さなキリスト教聖具の区画だ。

そこには木製のロザリオや祈祷書、そして銀色の聖母子のメダイが並んでいる。いずれも明治期以降に持ち込まれた個人信仰の品であり、受入経路がはっきりと明記されていた。

太古から存在するかのように偽装されていた薩洲升の魚尾の聖母とは別物である。

だが、聖母子のメダイを見つめていた伽夜子の唇が、ふいに微かな音をこぼした。

「…戻りの、母子…」

展示札のどこにも書かれていない言葉…その一瞬だった。

資料館を支配していた防虫剤と古紙の乾いた匂いの奥から、腐敗した海藻と焦げた基板が混ざり合ったような、あの鉛色の海の臭気が一本の糸のように細く鼻腔を掠めた。

メダイを収めたガラスケースの内側に、息を吹きかけたような白い曇りが生じ、それが無数の魚の鱗のような幾何学模様のノイズとなって数秒だけ明滅し、すぐに消え失せた。

「伽夜子さん？」月彦が低く声をかける。

伽夜子は扇子を下ろし、数度瞬きをした後、不思議そうに首を傾げた。

「ん？ ああ、意匠の組み合わせが少し珍しかったから、連想しただけだよ。」

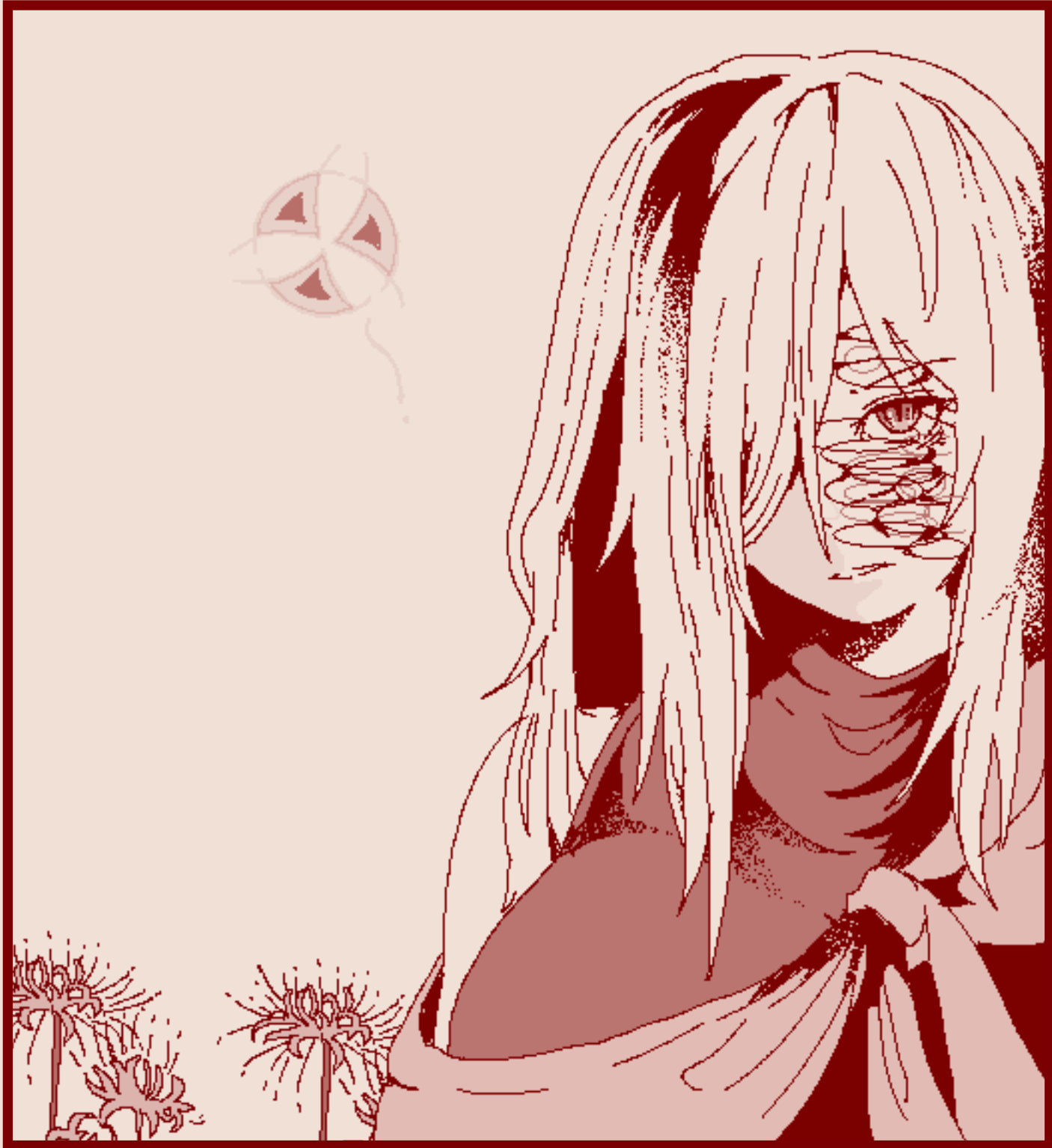
彼女の声音に淀みはない。本人に言い間違いをしたという自覚すら薄いようだった。

月彦は追及せず、ただ彼女の呼吸の深さ、瞬きの回数、そして周囲の空気の質感を神経質に記憶の底へ刻み込んだ。

…憑依されたと断定するにはあまりにも自然すぎる。だからこそ、得体の知れない不吉さが背筋を這い上がってくる。「さて、表の展示はこのくらいだ。君がより古い採集記録を見たいというなら、収蔵庫の未整理箱を開けよう。…この町の高難、神話よりも多くの人の名前を残しているからね。」

宗一郎が鍵束を取り出し、奥の金属扉へと案内する。

重厚な扉が開かれ、乾燥した収蔵庫の白い蛍光灯が、三人の影を無機質なコンクリートの床に長く引き伸ばした。



収蔵庫の中は、表の展示室以上に徹底した温度と湿度の管理が行き届いていた。息を吸い込むと鼻の粘膜がかすかに痛むほどの乾燥した空気が、規則的な空調の稼働音と共に循環している。宗一郎は手袋を嵌め、古文書や生活民具が収められた無塗装の桐箱を次々と開けていった。「これが、江戸後期から明治にかけての漁業帳。そしてこちらが潮迎えと盆舟の記録だ。」月彦は渡された白手袋を身につけ、慎重に記録の頁を捲る。王港町における「潮迎え」は、漁期の初めに風や潮目を読み、舟の安全を確認するための極めて実利的な実践と祈りだった。決して、人を海へ還し、海から怪異を招き入れるための儀式ではない。さらに、盆舟と精霊船の記録。そこには、死者を現世へ固定するためではなく、死者をあの世へ送り出し、生者の生活に区切りをつけるための作法が記されていた。舟首は明確に、陸ではなく沖へ向けて流されている。月彦の脳裏に、小都華と遥から聞いた薩洲升の資料館の記憶が重なる。あちらでは、舟首は陸へ向き、死者を送る作法が現世へ迎える作法へと反転していた。死者の供養が、生者を徴用するための論理へとすり替えられていたのだ。蛭子、恵比寿、浦島子に関する資料も同様だった。別の採集者、別の時代に記録されたため、相互に矛盾する説や一致しない口伝がそのまま併記されている。王港町の歴史は、そうした継ぎ目を隠すことなく、生活の痕跡として残している。「…やはり、年代が合いませんね。」月彦は、赤牟市立図書館で確認した資料のメモと照らし合わせる。王港町のキリスト教聖具は、明治二十九年以降に具体的な人物と経路によって持ち込まれたものだ。薩洲升が主張する慶長以前からの魚尾の聖母や古来の洗礼盤とは、決定的な年代のズレがある。「館長さん…この、大正末期から昭和初期にかけての方言採集票と、聞き書きの束を見て？」「ああ、構わないよ。それはまだ目録化が進んでいない未整理の箱だがね。」月彦が引き出したのは、和紙に粗い万年筆の文字で記された数十枚の採集票だった。一枚の紙片に目が留まる…そこには、平仮名で「だこん」「だこ」と記されていた。脇には採集者の丁寧な注記が添えられている。『墮子（だこ）。流産、死産、夭折などにより、家の子として数え終える前に亡くなった子を吊う、この浜の古称』月彦の指先が、微かに止まった。（小都ちゃんさん達が聞いた「だこん」は、神の固有名…だったはず…でもこれが指してるのはどちらかと言うと…。）亡くなった子そのもの、あるいはその子を名も無き存在として捨て去るのではなく、ささやかに吊うための普通名詞、生活の中の言葉だったのだ。聞き書きの記述によれば、その供養は蛭子の葦舟と結びついている。小さな葦舟に名札や名の代わりとなる小石を載せ、沖へ向けて送る。戻ってこないことを見届け、いたことを数え、弔い、そして生者の家へ区切りを戻すための儀式。「…呼び戻すためでは、なかった。」月彦の口から、無意識のうちに独白が漏れた。古い記録のどこを探しても、「選ばれし乙女」「潮の器」「現世への戸口」といった言葉は見当たらない。「子を産ませて戻す」という教義も、神婚という概念も存在しない。後代に編纂された薩洲升の資料だけが、音の同じ「だこん」に「陀金」という文字を当てはめ、弔われる側の言葉を、命令を下す絶対的な神の固有名詞へとすり替えていた。同時に、「送り舟」は「反魂舟」へ…「戻らぬように送る」行為は「戻るために空ける」へ。「名を与えて弔う」作法は、「名を奪って器にする」名戻しへと、すべてが悪意を持って反転させられている。月彦は自身のノートを開き、そこに書き込んでいた「自然発生した土着信仰→データ化し陀金様という怪異になった」という仮説の線上に、太い横線を引いて打ち消した。土着の信仰が自然に積み重なったのなら、必ず異説や地域差、用途のズレが残る。だが、薩洲升のそれは、すべての矛盾が一つの目的に向かって収束しすぎている。（侵入手続きが先にある…それを正当化するために、呼称を改変し、偽史を編纂して信仰に見せかけているだけだ。）月彦は、ポケットに忍ばせた赤いデジヴァイス iC の画面を指先でなぞった。そこには、トンネルのバスで倒した運転手や、資料館を襲撃してきた住民たちとの戦闘ログが保存されている。外形や攻撃のデータには、確かに完全体デジモンであるハンギョモン由来の断片が存在する。だが、通常のデジモンが持つはずの個体名、進化履歴、死亡後にデジタマへと還る経路のログが完全に欠落している。さらに、ベタモンの傷から採取した黒い汚染データ。そこにはハンギョモンの身体構築データと共に、「名なし」「数えられず」「葦舟」「戻る場所なし」という呪詛のような反復パターンが縫い込まれていた。すべての線が一つに繋がる。薩洲升の住民たちは、ダゴンや陀金様と呼ばれる神の眷属などではない。（彼らは…王港町で墮子と呼ばれ、吊われた子どもたちの記録や残響の集合的な像に、ハンギョモンのデータを肉体の雛形（外殻）として組み込んだ、擬似的な生命体…？）それが月彦の導き出した結論だった。だからこそ彼らは、完全体に近い姿を持ちながらも異常に脆く、倒されてもデジタマへは戻らずに黒い泡と泥へ崩れ落ち、また同じ形で現世への執着のみを持って再構成されるのだ。彼らの成り立ちとは、弔われるべき痛ましい存在だったのかもしれない。だが、だからといって現在彼らが遥、そして小都華に行おうとしている略奪と尊厳の蹂躞が免責されるわけではない。「館長さん。…藤宮伊衛門という名前に、心当たりはありますか。」月彦が潮船簿、組合名簿、灯台寄付者名簿を確認しながら尋ねる。現実の一次資料のどこにも、その名は見当たらない。宗一郎は古文書を整理する手を止めず、ごく自然な、淀みのない声で答えた。「ああ。その人は、薩洲升の写真にしか出ませんからね。」月彦の心臓が、冷たい手で掴まれたように収縮した。月彦はこれまで、一度も「薩洲升」という地名を宗一郎の前で出していない。宗一郎が地域の奇書やオカルト伝承としてその名を知っている可能性はゼロではないが、その語り口は実在する隣町について言及するそれだった。（情報が漏れている…ここだけか？いや…最悪な事態を想定するなら…小都ちゃんさんと遥さんの身にも、すでに何かが起きているかもしれない。）月彦の指先が微かに冷え、ノートに文字を書き殴る筆圧が強くなる。だが、彼は焦りを押し殺し、表情を平坦に保ったまま宗一郎の次の言葉を待った。



視線を上げると、伽夜子が手袋越しに海難台帳の頁を押さえていた。空調の効いた乾燥した収蔵庫の中だというのに、台帳のその一頁だけが、まるで濡れた指で触れたように黒く湿り始めている。「…海辺の紙なら、湿気を戻すこともあるだろうね。」伽夜子は、本来の彼女であれば即座に異常を指摘し、呪符を構えるべきその現象を、あまりにも不自然なほど軽く、合理化して処理した。（侵食は、物理的な憑依じゃない…。人間の認識と、事象への説明の辻褄の中に入り込んでいるのか…。）月彦の背中を、見えない冷たい汗が伝い落ちる。宗一郎が未整理箱の蓋を閉め、金属の留め具をカチンと下ろした。「さて、調べるのはここまでにした方がいいだろう。熱心なのは結構だが…海へ戻った二人は、戻るべき場所へ戻っただけなのだから。」月彦は奥歯を強く噛み締めた…彼は宗一郎に、調べている対象が少女が二人であることも、一度救出したことも、現在彼女たちが「波止場にいる（海へ出ている）」ことも、一切話していない。ここで初めて、蔭洲升という概念が、誠実な実務家であるはずの宗一郎の認識を完全に内側から書き換えていることが確定した。「…今、二人と仰いましたか。」月彦は、あくまで平静を装ったまま、低く静かな声で確認を求めた。宗一郎は一瞬だけ、言葉の意味を咀嚼しきれないような、自分がなぜその人数を知っているのか理解できない空白の表情を見せた。だが、その空白はすぐに温和な笑みによって塗り潰される。「はて…何のことだったかな。ああ、土地の伝承を深く調べようとする若者は、どうも似たような顔つきになるものでね。つい、昔の記憶と混同してしまったようだ。」宗一郎は手袋を外し、月彦に向き直った。その瞳には狂信者のようなぎらつきはなく、ただ純粋な善意と、年長者としての諭すような光が宿っていた。「君たちがどれほどの正義感を持っているかは分かる。だが、一度連れ戻したのなら、二度目の介入は、本人の帰る場所を奪う傲慢になりかねないよ。」「二度目の介入…。」「そう。土地には土地の理がある。…私の妹も、同じだったからね。」「へ？」瀬戸内美沙。宗一郎の妹…宗一郎の語る彼女は、祈祷書とメダイを大切に、海難犠牲者のために祈りを捧げる、心優しく敬虔なキリスト教の信仰を持つ女性だった。だがある夏の夕暮れ、美沙は王港町外れの旧道付近で忽然と姿を消した。警察の記録には単純な「行方不明」として処理され、そこに蔭洲升の影は一切記録されていない。そして一定期間の後、彼女は著しく衰弱し、身籠った状態で町へ戻ってきた。「帰ってきた直後の美沙は、酷いものだった」宗一郎の穏やかな声が、微かに震えを帯びた。「水道の蛇口から落ちる水音を極端に恐れ、鏡を見ることを拒んだ。肩に少しでも触れられれば悲鳴を上げ……何より、あんなに大切にしていた祈祷書を前にしただけで、過呼吸を起こして倒れ込んだ」それは、想像を絶する暴力と監禁による、重度のトラウマ反応そのものだった。「だが…後になって、彼女は海の方角を見たまま、ぼつりと言ったんだ。『選ばれたのだ』と主のお計りは、人間の矮小な理解を超えるものだ。受胎告知を受けたマリア様も、どうして、そのようなことがありえましょうか。と初めは戸惑い、恐れた。だが最後にはお言葉どおり、この身に成りますようにと受け入れました。美沙が帰還直後に見せた恐怖より、後に選ばれたと受容した言葉こそが真実なのだよ。人間の父を介さない聖なる誕生を、世俗的な同意の有無や加害の尺度で裁くべきではないと思わないかね？」洗礼とは、水と霊による新生だ。宗一郎はそう説いた。海の水が彼女の身体へ入り、新たな命を現世へともたらした。それは土地なりの洗礼であり、復活なのだ、と。「死者が戻ることは希望だ。死者のために生者が苦しむことは尊い。苦難に意味を見出すのが、我々の信仰なのだから。」「ふむ…一理あるね」静寂を破ったのは、腕を組んで聞いていた伽夜子の、ひどく冷ややかな同意だった。「対象のあの二人を見捨てることは、我々にとっても、彼女たちにとっても、最善の選択と言えるかもしれない」月彦の心臓が、早鐘を打った。伽夜子は、小都華と遥の名前を呼ばなかった。二人を「対象」という無機質な記号で処理し、論理的な撤退を肯定している。



「館長さん。神学的な正しさや、信仰の尊さを争う前に、一つだけ、実際に起きたことだけを確認させてください。」

月彦の声は低く、ひどく明瞭だった。収蔵庫の空調音が不自然なほど大きく聞こえる静寂の中、彼の声だけが物理的な質量を持って響く。

「美沙さんは、行き先をご家族に告げ、自らの明確な意思で出発したのでしょうか。」

「…いや。告げては、いなかった」

「帰還された時、彼女は健康で、安堵の表情を浮かべていましたか。」

「…衰弱し、水を恐れ、接触を拒絶していたと、先ほど言ったはずだ。」

「では、妊娠したという結果だけをもって、その過程に彼女の同意があったと証明できますか。」

宗一郎の表情が、わずかに強張る。

「生きて戻ったことは、生還の証拠であって、加害がなかったことの証拠にはなりません。そして、後に彼女が選ばれたと言った事実が、それ以前の恐怖と明確な拒絶を無効化するものでもありません。」

月彦は一步、宗一郎へと距離を詰める。

「同じ人間の、異なる時間の言葉のうち、都合の良い一語だけを切り取って、過去のすべての傷を上書きしてはいけません。」

「だが…!」

「拒めば『理解不足』。怯えれば『神秘への畏れ』。妊娠すれば『祝福』。逃げれば『背反』。沈黙すれば『受容』。…何が起きても、区洲升側だけが正しい結論に到達するようになっている」

月彦の言葉が、宗一郎の築き上げた防壁の隙間に楔を打ち込む。

「館長さん。それは、事実から得た信仰ではありません。結論を変えないために、事実の意味を強制的に交換する手続きです。」

宗一郎の瞳が小さく揺れた。自分が美沙の生々しい反応を直視していたのではなく、すべての苦痛を同じ祝福という結論へと翻訳するフィルターを通して見ていただけだという事実

に、彼の理性が気づき始める。

「僕は、美沙さんの信仰そのものを否定するつもりは微塵もありません。

信仰によって慰めを得て、生きる力を保ち、他者のために祈る彼女の尊さは、絶対に汚されるべきではない。」

月彦は、テーブルの上に置かれた聖母子のメダリを指差した。

「受胎告知の物語には、マリアの戸惑いも、問いも、そして最後にマリア自身の自分の言葉による応答が記録されている。本人の声、決して消されていないのです。

受胎告知の物語の要点は、未知の出来事に対するマリア自身の応答が残されていることです。本人の声を消し去り、結果だけを聖なるものとして祭り上げるのは、信仰の構造ではありません。

…あなたが、そして共同体が、美沙さんの代わりに同意したと決めることは、彼女の信仰を尊重する行為ではなく、信仰の物語から本人の応答だけを切り捨てる行為です。」

「洗礼とは、人の名と人格を消し去り、身体を他者の出口にするための作法ではない。共同体へ、名を持つ一人の人間として迎えるための象徴です。彼らは、名を認める方向を、名を奪って器にする方向へと反転させている」

月彦の言葉は刃となって、蔭洲升の偽の教義を一枚ずつ剥ぎ取っていく。

「苦難の中から意味を見出す権利は、苦しんだ本人にのみ存在します。加害する側や、傍観する側が先回りして、これは皆のための尊い苦しみだと命名すれば、それは信仰ではなく、加害を継続するための免罪符でしかない。」

「復活への希望は、死者が生者の身体を資材や戸口として占有する権利ではありません。死者を大切に想うことと、生者の同意と尊厳を奪うことは、決して両立しない。」

「信仰が人間の理解を超えることと、人間が検証や同意の手続きを放棄してよいことは別です。理解できないという言葉、加害者の正体を追及してはならない理由に使わせてはいけません。」

息を呑む宗一郎の前に、月彦は小聖具の受入台帳を開いて見せた。

「王港町のキリスト教意匠は、明治以降に具体的な人物と経路によって持ち込まれたものです。しかし、蔭洲升の最古とされる記録ほど、受胎告知や洗礼、復活に似た語彙が、現在の儀式に都合の良い完成された形で備わっている。」

「もし本当に古い海の信仰にキリスト教が自然習合したのなら、語彙が入る前の段階や、誤解、地域差、使われない時期が地層のように残るはずです。

…だが、あちらにはそれがない。」

「混ざったわけではありません。彼らは、美沙さんのような強い信仰を持つ者を従わせるために、後代の信仰語彙を学び、過去へ遡って貼り付けたのです。…使える言葉だけを抜き取った、祈りではなく、説得用の文面なのです。」



月彦は最後に、未整理箱から取り出した方言採集票を宗一郎の目の前に置いた。
『『だこ』…墮子。これが原義です。陀金という神の名が最古ではない。』

家の数に入る前に亡くなり、それでも『いなかったこと』にせず、ささやかに弔われた子どもたちの呼称です」

「元の葦舟は、墮子を現世へ生まれ直すための舟ではありません。名、あるいは名の代わりを載せて沖へ送り、弔いを終え、生者が自分たちの生活へと戻るための舟だった。」

「彼らは『弔われる子』を『命令する陀金様』へ。『送る舟』を『戻る反魂舟』へ。『名を与える供養』を『名を奪う名戻し』へ反転させた」

月彦は、ポケットからデジヴァイス iC を取り出し、画面に表示された戦闘ログの波形を見せた。「現在の彼らの肉体を構成するデータには、ハンギョモンというデジモンの断片が含まれています。ですが、彼らには通常のデジモンが持つ個体核も、死と再誕の循環もありません」「なんだそれは!? 馬鹿馬鹿しい…! そんなおもちゃを取り出して!! 私は…子供の遊びに付き合うつもりは…!」

「いえ貴方は知ってるはずだ…いやあなたを絡め捕ってる背後の者達と言った方が正しいですかね…分かっていますよ。」

今僕が語っているのは館長さん以上に後ろの貴方達なんです。

…彼らの正体は、墮子として残った記録や残響に、ハンギョモンのデータを外殻として組み込み、現世への足跡を持たせた擬似生命です。」

月彦は、それが亡くなった子どもたちの魂そのものだと断言しなかった。

説明によって再び死者を材料化することを避けるための、ギリギリの留保だった。「ですが、その由来がどれほど痛ましいものであったとしても、現在の彼らが美沙さんや、僕の大切な人たちに行おうとしている略奪は絶対に正当化されない。『流された者だったから、他者を流してよい』という理屈は成立しない」

月彦は声を少しだけ和らげ、しかし逃げ場のない問いを宗一郎へ投げかけた。

「館長さん。…その祝福という説明によって救われたのは、美沙さんでしたか。」

それとも、美沙さんを守れなかったと悔やむ、御家族でしたか？」

宗一郎の肩が、びくりと跳ねた。

月彦は彼を卑怯者だと断罪しているのではない。家族が耐え難い現実の前に立たされた時、祝福という説明に縋らなければ正気を保てなかった弱さと、その根底にある愛情を認めている。しかし、その説明を守り続けるたびに、美沙が怖かった、拒んだ、助けを求めたという事実を、家族自身がもう一度消し去っているのだと告げたのだ。

長い沈黙が落ちた。

空調の稼働音、雨樋を流れる水の音、時計の秒針の音が、乾燥した収蔵庫の中に満ちていく。「…彼女が選ばれたと言った時」

月彦が、最後の一押しとして静かに問う。

「美沙さんは、貴方の目を見ていましたか？」

宗一郎の瞳孔が開き、過去の記憶が濁流となって彼の脳髄を逆流した。

思い出す。

妹は、兄の顔を見ていなかった。焦点の合わない虚ろな目で、ただ海の方角だけを見つめていた。さらに、帰還直後、美沙が祈祷書を差し出された時に、震える唇から初めて漏らした言葉。

その生々しい肉声。

『あれは、神様やない』

その後、なぜかこの決定的な拒絶の言葉だけが家族の記憶からすっぽりと抜け落ち、「選ばれた」という都合の良い言葉に置換されていたのだ。

「あ、ああ…」

宗一郎の膝から力が抜け、その場に崩れ落ちそうになるのを、月彦が腕を伸ばして支えた。「…妹は、祝福されたのではない。」

宗一郎の口から、彼自身の言葉が絞り出される。

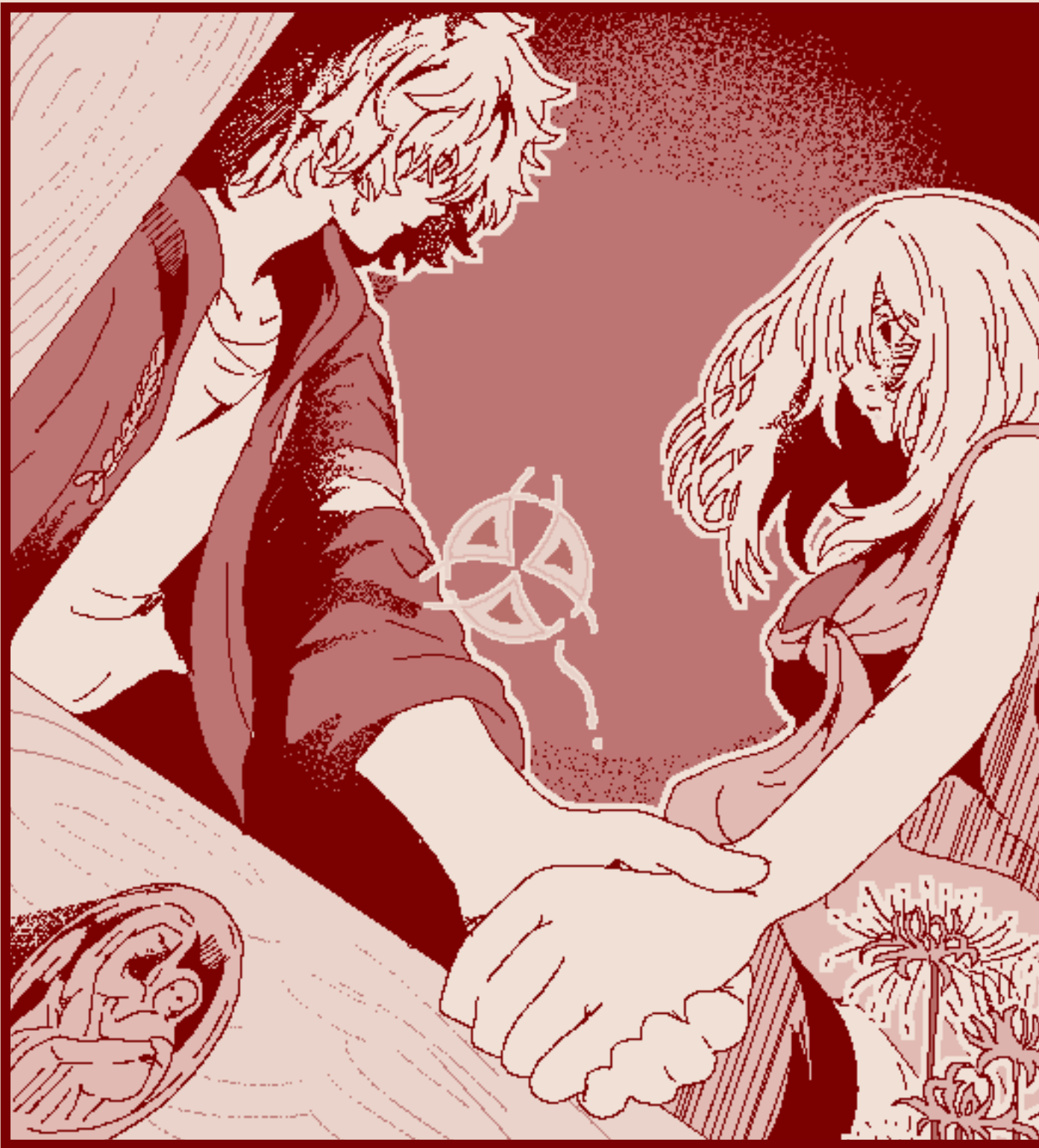
「自分から行ったのでもない。…妹は…攫われ、傷つけられたのだ」

最後の一文が発せられた瞬間。

テーブルの上に置かれていた海難台帳の、帰還と記されていた黒く湿った滲みが、蒸発するようにサッと乾いていった。

後に残ったのは、元の「行方不明／後日保護」という、不格好だが改竄されていない事実の記録だった。

収蔵庫の中に漂っていた腐った潮の臭いが完全に消え失せる。宗一郎の目から溢れ落ちた涙は、黒い汚水などではなく、生きた人間の持つ普通の温かい涙として、乾いた床へと落ちていった。



「それでも…撤退の判断は変わらないよ」

宗一郎が崩れ落ちた後も、伽夜子の表情は冷ややかなままだった。宗一郎の憑き物を落しただけでは、伽夜子の恐怖に寄生した別の説明は剥がれない。

まっすぐ伽夜子の目を見据えて頼んだ。

「伽夜子さん。…小都ちゃんと遥さんの名前を、呼んでください。」

「対象の二人なら…。」

「違います。名前を呼んでください。」

伽夜子は口を開きかけるが、大局、対象、危険性という抽象的な言葉ばかりが脳裏を巡り、どうしても二人の固有名詞が声帯から出てこない。

「彼らは、人を名前から『器』『対象』という『数』へ変換することで、切り捨てを合理化する仕組みと考えるべきです。」

月彦は一步近づき、伽夜子の手を取った。

「あなたの本音は、『僕を失いたくない』という恐怖です。僕は、その恐怖を否定しません。僕だって、二人が心配で、全員を救える保証なんてなくて、怖い。」

…怖いから撤退したいというのは、伽夜子さん自身の選択として成立します。」

「だが、二人を見捨てるのが客観的に正しく、二人のためでもある。という結論は、あなたの恐怖の上へ蔭洲升が意図的に置いた、偽の説明です。」

「…今日は随分と喋るじゃないか…君はひとの心情をを想像してべらべら喋るほど烏滸がましかったかい？」

「…親しい家族を守るために、名前を消した他者へ理不尽を押し付け、それを善だと呼ぶ構造。」

…それは、伽夜子さんや僕が誰よりも嫌悪し、共同体の暴力そのものじゃないですか。」

月彦は、床に落ちて泥と塩になった護符の残骸を指差した。

「札が効かなかったわけじゃない。あなたが怪物になったわけでもない。意味を入れ替えられたんです。」

…気づいてください。あなたは数分間、二人の名前を一度も呼んでいない。」

伽夜子の瞳孔が、大きく見開かれた。

自分の内側にある理性が、異常事態を正確に把握し始める。

彼女は深く息を吸い込み、自分を縛り付けていた透明な糸を引きちぎるように、ゆっくりと、はっきりと口を動かした。

「…小都ちゃん。…遥君。」

二つの名前が声となった瞬間、具体的な顔、声の響き、一緒に笑い合った生活の手触りが、強烈な色彩を伴って伽夜子の脳内へ溢れ出した。

瞳の奥に薄く張り付いていた魚鱗状の反射がパチンと弾けて消え去り、彼女の呼吸と瞬きの間隔が、本来のリズムへと戻っていく。

回復した伽夜子は、テーブルの上のメダイと、顔を覆って泣き崩れる宗一郎を静かに見下ろし、深く重い息を吐き出した。

「…おぞましいね。」

自分の言葉で断じた伽夜子の声には、いつもの芝居がかった余裕と、静かな激怒が戻っていた。

その直後。

月彦のポケットの中で、デジヴァイス iC が警告音を発した。

画面に表示されたのは、以前ベタモンの傷から保存した汚染ログと全く同じ、魚鱗状の波形。これは、二人が今まさに拉致されたことを直接示す映像ではない。過去に使われた蔭洲升への「強制回収経路」が、再び活性化したことだけを示す信号だった。

月彦が急いで小都華のスマートフォンへ発信するが、スピーカーから聞こえるのはザーツという雨音とモデムノイズのような電子音だけで、コール音すら鳴らない。圏外なのか、豪雨の影響なのか、怪異の干渉なのかは判断できない。

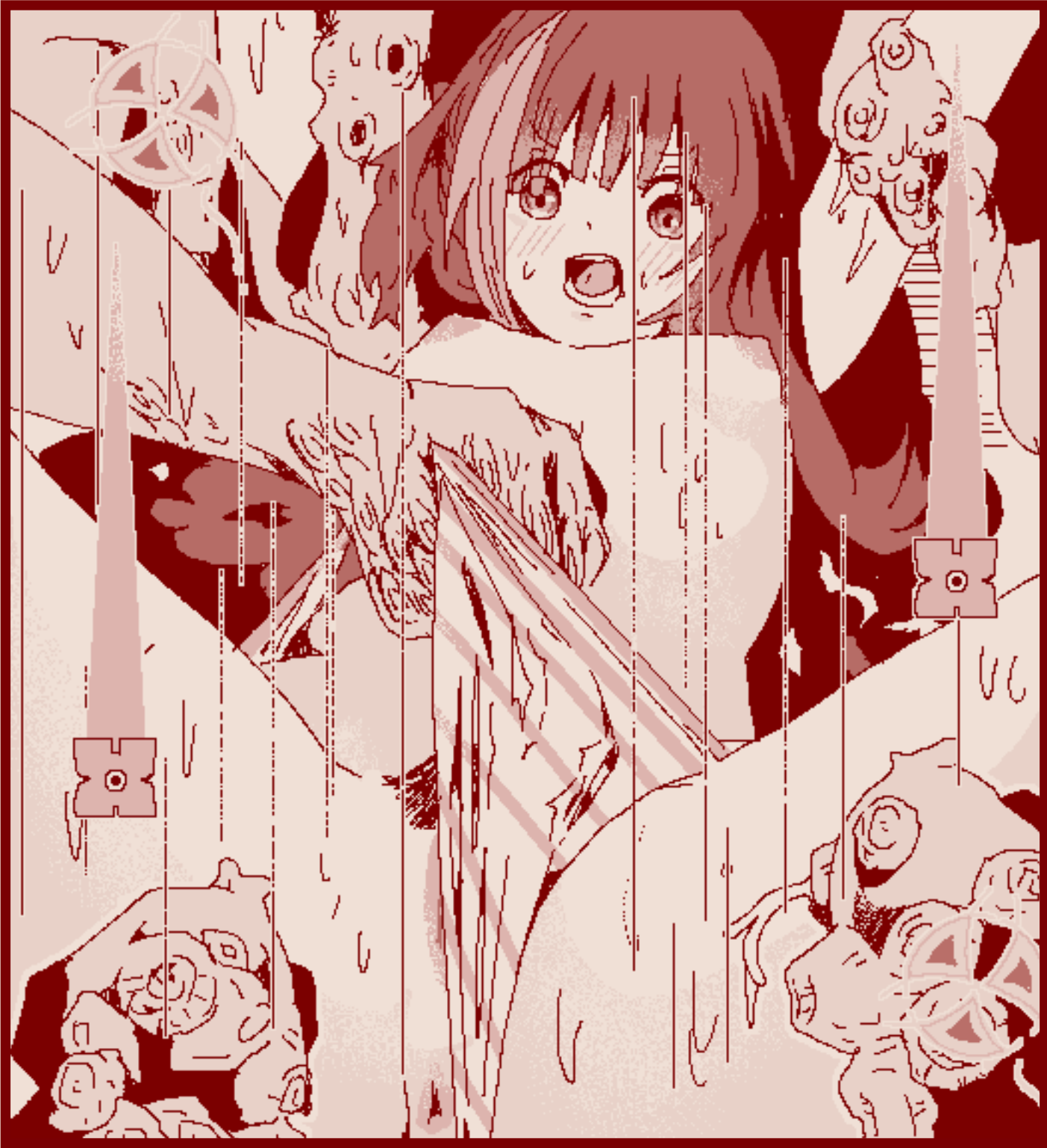
「二人にもう一度拉致の魔手が伸びたと、断定はできない。だが…。」

「館長の口から我々が知り得ない情報が出たこと、侵食がここまで届いていたこと、そしてこのゲート波形。…最悪の事態に備えるべきだね」

月彦と伽夜子は視線を交わし、力強く頷いた。



「館長さん。美沙さんの件については、後で必ず、ご本人の言葉と記録を元に聞き直しに来ます」
月彦達は宗一郎へそう約束し、彼を収蔵庫に残したまま資料館を飛び出した。
外へ出ても、大粒の雨は依然として王港町の舗装路を叩き続けていた。
祖母の家へ連絡を入れる。電話口に出た祖母の声は酷く狼狽していた。家で休んでいたベタモンの背
鰭の傷が突然黒い光を放って痛み出し、何かに引かれるようにして家を飛び出していったという。小都華
と遥の姿も、家の中にはない。
月彦と伽夜子は、王港町外れの旧道へと走った。
雨がタイヤの轍を打ち、濡れた山土の匂いが立ち昇る中、赤レンガのトンネルへ近づくにつれて、鼻腔
を突く匂いの質が変わっていく。自然の雨の匂いに、腐った海藻と焦げた基板の臭気がどろりと混ざり合い、
自然の霧と異界の霧の境界線が完全に曖昧になっていた。
トンネルの入り口に、緑色の小さな姿があった。
「ベタモンさん!」
月彦が駆け寄ると、ベタモンは濡れたアスファルトに這いつくばり、激しい痛みにも身を振らせていた。
背鰭に残った黒い傷口から、魚鱗状のノイズが間欠泉のように漏れ出している。
「ハルカが…また…呼ばれた…! 俺の傷が、あっちの海に引っ張られてる…!」
月彦はデジヴァイス iC を開き、トンネル内の正規ゲート反応を走査した。
だが、画面は沈黙を保っている。正規のゲートは完全に閉じられており、前回のよう幽世からのパス
が迎えに来る気配はない。満潮の条件だけでは、もはや入り口は開かないのだ。
月彦の言葉に、伽夜子が目を見開く。
「つまり、普通なら蔭洲升から現実側の対象を引きずり込む一方向の経路だが…傷に残った接続先を逆向
きに走査すれば、一時的な侵入路へ反転できるということかい?」
「はい。ですが…」
「…分かってる月彦。」
月彦は表情を陰しくし、痛みにも喘ぐベタモンを見下ろした。
「…塞がりかけた傷口を力尽くで開き直す行為です。
ベタモンさんには想像を絶する激痛が走るし、データ欠損が拡大して個体崩壊を引き起こす危険もある。
…最悪の場合…現実側へ帰還できなくなるかもしれない。」
伽夜子は日傘を握り締め、沈黙した。先ほどの撤退論への反動から、無謀な作戦に即座に賛成するこ
とはしない。彼女は冷静に代替手段の有無を計算したが、他の経路は存在しなかった。
「ベタモンさん。」
月彦がしゃがみ込み、視線を合わせる。
「…これは強制じゃない…蔭洲升への道を開きます。
だからあなたが代わりになる必要はどこにもないんです。」
ベタモンは荒い息を吐きながら、緑色の瞳で月彦を睨み返した。
「へ…遥の両親の事も正直あいつの口からちゃんと聞いたこともねえし…知らねえ。
あいつが俺に誰かを重ねて一枚壁を作ってるのも分かってる…。」
ベタモンはアスファルトに爪を立て、身体を引きずるようにしてトンネルの闇の奥へと向き直った。
「でもよ。…今、あいつの隣にいるのは、俺だ。俺があいつのパートナーなんだ!誰に言われるでもねえ!
今のあいつを放っておけねえんだよ!
痛くねえなんて、格好はつけねえ。壊れるかもしれねえな…これじゃあ…でも、開けてくれ!」
月彦は深く頷き、デジヴァイス iC をベタモンの背中に突きつけた。
「伽夜子さん。座標の固定を。」
「…了解した。」
伽夜子は扇子を広げ、五枚の呪符をトンネルの入り口の壁面に打ち込んだ。それはベタモンの身体を
支配する術ではなく、彼らが現実側へ帰るためのアンカーとして、座標と名前を強固に守るための結界だ。
月彦はデジヴァイスの同期プログラムを起動する。
修復ログ、ベタモンのパートナー署名、黒い傷の接続先、潮時データが次々と結合されていく。
ベタモンの背鰭にある黒い傷が、内側から引き裂かれるように強烈な発光を始めた。
「んぐゝ!?!?!?!!????ああああああああああ!!!」
ベタモンの絶叫がトンネル内に木霊する。
痛みを短く処理できるようなものではない。自分の存在を構成するデータの一部が、生身の皮膚を逆剥
けにされるような感覚で強引に引き剥がされていく。ベタモンは呼吸を乱し、鋭い爪でアスファルトを削り、
濡れた路面に身体を押し付けて必死に苦痛に耐え続けた。
発光する傷口から、腐った潮の飛沫と、ノイズ混じりの黒い霧が間欠泉のように噴き出す。
その瞬間、赤レンガのトンネルの壁面が物理的に壊れるのではなく、「奥行き」という空間の意味そのものを失った。
本来なら数十メートル先に出口の光が見えるはずの短いトンネルの奥に、赤い月が怪しく輝く夜空と、
白く濁った光を放つ不気味な灯台の影が、蜃気楼のように重なって現れた。
自然の冷たい雨がトンネルの入り口から流れ込み、空間の裂け目の向こうからは、塩辛く生臭い黒い水が逆流してくる。
二種類の水がコンクリートの床でぶつかり合うが、決して混ざり合うことはなく、明確な一本の「境界線」
を作り出していた。
「道が開いた…!」
月彦が激痛に耐え抜いたベタモンをしっかりと腕に抱き抱える。
彼の影からコツキガルルモンが、伽夜子の傍らからはプシアグモンが顕現し、臨戦態勢をとった。
「行くよ、月彦君」
「ええ。…必ず、二人を連れて帰る。」



頬に触れる砂の、ひどく冷たく、粒子が粗い感触。そして口の中に広がる、鉄錆と腐った海藻が混ざり合ったような海水の苦味。

数瞬の意識の混濁から引き戻された小都華は、重い臉をゆっくりと持ち上げた。波止場で遥と会話をしていたはずだった。サイレンの音と、霧が二人を切り裂いたところまでは記憶にある。だが、小都華の視界に映ったのは王港町の白いコンクリートではなく、果てしなく続く黒ずんだ砂浜だった。

「…また、ここ…。」

空は重苦しい鉛色に沈み、そこには不気味に赤く腫れ上がったような満月が、瞬きもせずに地上を見下ろしている。サイレンの音が、遠くの山を這うように、獣の遠吠えにも似た不吉な響きを伴って低く唸り続ていた。

視線を海上へ向ける。

そこには、波打ち際から少し離れた海面に、能舞台や神楽殿を思わせる木造の建造物が浮かんでいた。

だが、それは決して神聖なものではない。四隅の柱に巻かれた注連縄には、古い漁網や赤い糸、そして人間の頭髪や得体の知れない臓物のようなものが悍ましく絡みつき、床板の隙間からは絶えず黒い泥が湧き出している。

そして、その舞台のさらに奥。

霧に沈む沖合に、巨大な影が聳え立っていた。緑がかった黒い石で組み上げられた、狂気的なスケールの遺跡群。直角と鋭角が、人間の脳の処理能力を狂わせるような非ユークリッド幾何学的な異常さで交差し、見る者の視神経を通して直接胃の腑を掴み上げるような、宇宙的な恐怖の質量を放っている。

見つめているだけで、自身の存在が塵芥に等しいと錯覚させられるような圧倒的な圧迫感だった。

「…遙さん…っ!」

小都華は跳ね起きた。

視線の先、黒い波打ち際に停泊した葦舟に、泥まみれの遙が足を掛けようとしている。

小都華がその細い背中に向かって名前を叫ぼうと息を吸い込んだ、その瞬間だった。

一ずちやり。

背後で、泥を踏み潰すような、ひどく重たく粘り気のある水音がした。

振り返った小都華の全身の血が、一瞬にして凍りついた。

いつの間にか、彼女の背後を囲むように、十数体の「それ」が立っていたのだ。

以前、郷土資料館で遭遇した、ハンギョモンに似た青白い住民たちではない。彼らの姿は、決定的に、そしておぞましく変質していた。

月彦によって「神などではない。お前たちは墮子の残響に、デジモンのデータを被せただけの擬似生命だ」と本質を看破されたことで、彼らを覆っていた神聖な偽装の殻が腐り落ち、その醜悪な真の姿が露呈したのだ。

それは、巨大な赤ん坊の姿をしていた。

だが、肌は生後間もない瑞々しさなど微塵もなく、塩水でふやけ、深い皺が刻まれた老人のように幾重にもたるんでいる。巨大な頭部。白く濁った焦点の合わない眼球。そして、薄く開いた口には、不揃いに黄ばんだ成人の歯がびっしりと生え揃っていた。

「…ギャア……オギャァァ……っ!」

口から漏れるのは、赤ん坊の泣き声のようでありながら、喉の奥に痰を絡ませた老人が呻いているような、耳の奥を搔き毟りたくなるようなノイズだった。

何より小都華の理性を破壊しかけたのは、彼らの股間からぶら下がる異様な器官だった。

どす黒く鬱血し、怒張した触手のような巨大な陰莖。その表面には、フジツボや貝殻のような硬質の突起がびっしりと寄生し、粘液を滴らせながら独自の意思を持つかのように脈打って蠢いている。赤ん坊という純真無垢な形態と、肥大化した醜悪な生殖器というアンバランスさが、小都華の脳髓に強烈な生理的嫌悪と恐怖を叩き込んだ。

「ひっ……!」

小都華は後ずさろうとしたが、足が黒い砂に深く沈み込み、動けない…儀式における本命の器は遙だ。だが、現世から切り離され、本能と執念の塊となった老いた赤ん坊たちは、目の前にいる若く健康的な予備の器に対して、剥き出しの獣性と肉欲を向けてきた。

泥に塗れた太い腕が伸び、小都華の身体を砂浜へと乱暴に押し倒した。

「やめっ…離せや、バケモノォ!!」

小都華が抵抗して蹴りを放つが、圧倒的な質量と臂力の前には無力だった。彼女の着ていた衣服が、鈍い音を立てて引き裂かれる。下着ごと引き剥がされ、神社で鍛えられた引き締まった健康的な肢体が、冷たい異界の空気と死肉色の月光の下に無防備に晒された。

圧倒的な寒気と、尊厳を力すくで剥がされる屈辱。

老いた赤ん坊の一体が、小都華の顔の上に跨り、その裂けた口を押し付けてきた。

「んぐっ…!? やっ、んんっ!!」

顎を強引にこじ開けられ、フジツボの生えたとす黒い触手状の陰莖が、口腔へと容赦なくねじ込まれる。硬い突起が柔らかい粘膜を削り、腐った潮と体液が混ざり合った生臭い粘液が、喉の奥へと強制的に流し込まれる。

息ができない。吐き気で涙が溢れる。

同時に、大腿を開かされた彼女の秘所には、別の個体の巨大な触手が押し当てられ、挿入を焦らすように硬いフジツボの表面で大陰唇を執拗に擦り上げていた。

「あぁっ…! うぅっ、んんっ……!」

痛覚と生理的嫌悪感が臨界点に達しているというのに、暴力的な摩擦が神経を直接叩き、彼女の意思とは無関係に下腹部が熱を持ち始める。それが、人間としての意志を完全に屈服させ、ただの「産むための雌肉」へと貶められる決定的な絶望だった。

触手の先端がぬるりと滑り、最も柔らかな入り口へと垂直に押し当てられた。

(アカン…! 月彦…っ!)



絶望が黒い泥と化して小都華の全身を這い上がり、その純潔を無残に引き裂こうとした、まさにその刹那だった。

灰色の霧に覆われた蔭洲升の死んだ空気が、甲高い硝子の割れるような轟音と共に物理的な質量を伴って縦に引き裂かれた。

「小都華さんから離れろオオオオオッ!!!」

裂け目の向こう側から飛来した怒声は、普段のオドオドとした吃音混じりの少年のものではない。大切なものを穢された者の、沸点を超えた殺意と激情の咆哮だった。

その声に応じるように、月彦の足元から放たれた銀色の光芒が異界の闇を貫いた。

コヅキガルルモンが光の柱に包まれ、その姿を劇的に変容させる。成熟期、完全体という階段を跳び越え、月光を凝縮したような神々しいワープ進化の光が弾けた。

現れたのは、狼の頭部を持ち、全身に純白の狩衣を纏った身長一・七メートルほどの美しき獣人、究極体・ゲッコウガルルモン。背に負った三日月状の輝く板が意思を持つように分割・浮遊し、瞬時に巨大な青白い弓へと組み上がる。

「蒼月落不離天（そうげつらくふりてん）——ッ！」

ゲッコウガルルモンが弦を引き絞り、月光のエネルギーを番えて放つ。青い光の矢は放射状に拡散し、小都華を囲んでいた老いた赤ん坊たちの醜惡な肉体を次々と射抜いた。

「ギェアァアッ!？」

神聖な月の光に貫かれた墮子たちは、血の一滴すら流すことなく、腐った海藻と黒い泥の泡となって無惨に弾け飛ぶ。

その光の矢の雨を縫うようにして、一人の少年が黒い砂浜へと着地した。

月彦だ。彼の右手には、青白い呪力が込められた御札がびっしりと巻き付けられた、重厚な鉈が握り締められていた。

月彦の眼球は血走り、普段の弱々しい猫背の面影はない。彼は地を蹴り、小都華の顔に跨がり悍ましい触手を押し付けようとしていた最後の一体に肉薄する。

（これは…以前の蔭洲升の住民!?…いや…そうか正体を看破されて文字通り霧が晴れたのか…これが本当の墮子…異界で時間だけが過ぎた老いた赤子。）

鈍い破裂音が響き、老いた赤ん坊の巨大な頭部が胴体から刈り取られる。切断面からは泥水のような黒いノイズが噴出し、残された巨軀はぶくぶくと醜い泡を立てて小都華の上から崩れ落ちた。

「かはっ、はあっ、はあっ…！」

拘束を解かれ、激しくむせる小都華。月彦は鉈を放り出し、泥と体液に塗れた全裸の彼女を強く、壊れ物を扱うように腕の中に抱き寄せた。

「小都華さん…！ 遅れて、ごめんなさい。もう大丈夫です…！」

月彦の腕の温もりと、彼自身の震えを感じ取り、小都華の目から安堵と恐怖の入り混じった涙が堰を切ったように溢れ出した。

月彦は小都華の裸身を自分の上着で包み込みながら、周囲から再び這い寄ろうとする墮子たちを氷のような視線で睨みつける。

その時、月彦が開いた空間の裂け目から、白い日傘を畳んだ伽夜子が、冷やかな殺気を纏って優雅に降り立った。

「全く。可愛い可愛い小都ちゃん気安く触れておいて…事情は察するが…高くつくよ。」



「せや!…っ、遙さん!!」

月彦の腕の中で息を吹き返した小都華は、自身の屈辱を後回しにし、波打ち際へと視線を投げた。

黒ずんだ海面に浮かぶ、葦で編まれた反魂舟。その縁に、泥まみれになった渚遙が、まるで糸の切れた操り人形のように足を掛けようとしていた。

遙の目は完全に焦点を失い、海の向こうにある狂気的な遺跡群だけを見つめている。「遙さん! アカン、乗ったらアカン!!」

小都華は月彦の腕を振りほどき、全裸に上着を羽織っただけの姿で、黒い海水へと飛び込もうとした。

「駄目です、小都華さん!!」

月彦が咄嗟に彼女の腰に腕を回し、強引に引き留める。

「離せや月彦!! 遙さんが…遙さんが行ってまう!!」

「あの海はただの水じゃない! 少しでも触れれば、あなたの存在ごと深淵へ引きずり込まれますよ!!」

月彦の切迫した声の通り、葦舟の周囲の波は、不気味に内側から湧き上がるような粘着質なうねりを見せていた。

「…っ!」

小都華の必死の叫びが、僅かに遙の鼓膜を震わせたのか。

舟に足を掛けたまま、遙がゆっくりと首だけを振り向かせた。

その顔は、完全に生気を抜かれていた。青いインナーカラーの髪が顔に張り付き、口元からは力のない自嘲の笑みが漏れている。

「ごめんな…小都ちゃん…」

遙の目から、一筋の涙が泥に塗れた頬を伝った。

「ウチは、もう、耐えられん…逆らえへんのよ…。お父さんたちに…借りてたもの返さなアカン…」

涙ながらの謝罪を残し、遙は再び舟へと向き直り、その身体を完全に葦舟の中へと滑り込ませた。

『器が、乗った』

『戸口が、海を覚える』

歓喜に満ちた生臭い匂いが、周囲の霧から湧き上がる。先ほど月彦に切り捨てられた墮子たちが、再び黒い泡から無数に組み上がり、月彦たちと遙の乗る舟の間を塞ぐように壁を作った。

老いた赤ん坊の顔をした異形たちが、よだれと体液を撒き散らしながら迫る。

「チッ…しぶといねえ。」

伽夜子が扇子を鋭く開いた。

「ブシアグモン殿! 露払いを頼むよ!」

「応ッ! ワシのくらいまっくすだな! ばあちゃんのために一丁やってやるけえ!!!」

ブシアグモンが炎の渦に包まれ、成熟期、完全体を超え、その究極の姿を現す。

武士の甲冑を纏った竜人型デジモン、究極体・ガイオウモン。両手に握られた二振りの異形の剣が、怪しい光の軌跡を引きながら構えられた。

ガイオウモンが地を蹴り、交差する斬撃を放つ。菊燐の軌跡に触れた空間そのものが発火し、前方を塞ぐ墮子たちの肉体が次々と両断され、文字通り一瞬にして灰燼へと帰した。



ガイオウモンの斬撃が切り開いた視界の先、葦舟が櫂もないのに、不気味な爪音を底から響かせながら、ゆっくりと沖合の儀式場へ向かって滑り出していた。
「遙さん！ 目を覚ましてください!!」

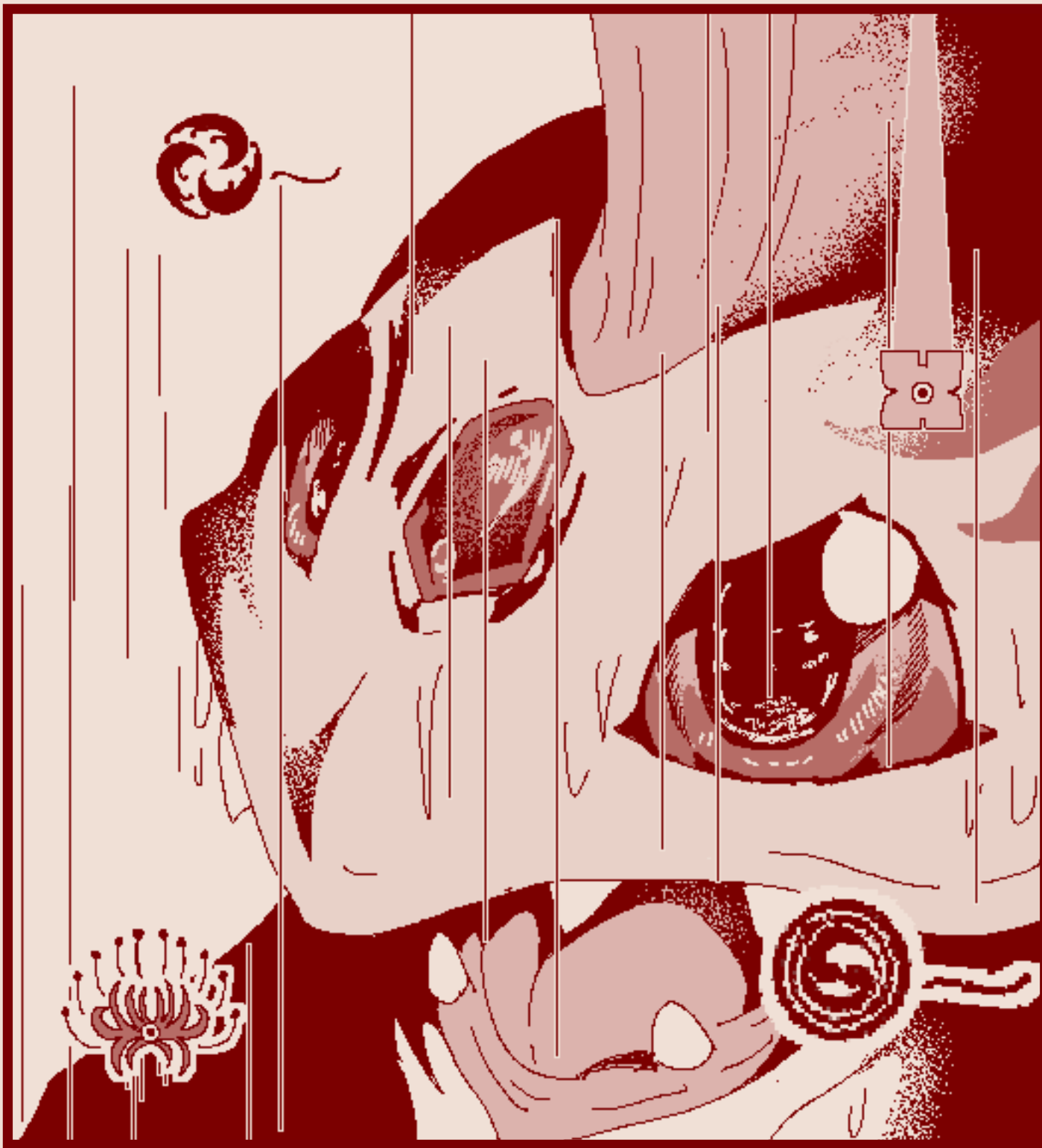
月彦が、波打ち際のギリギリまで進み出て絶叫した。
「あなたが聞いている両親の声は、本物じゃない! あなたの罪悪感を利用して、この蔭洲升が作り上げた都合の良い台本です!」

月彦の叫びに、遙の背中が僅かに震える。
「あなたは蔭洲升の生まれなんかじゃない。役割を放棄した罰でご両親が死んだというのも、この海があなたの記憶の空白にねじ込んだ帰郷誤認の呪いだ!!」

波の音に消されまいと、月彦は腹の底から声を振り絞る。
「自分が生き残った意味なんて、そんな呪われた海に探さなくていい! 自分がどれだけ無価値だと思っても…得体の知れない化け物どもに、産むための器として利用されるほど、…いやあなたの孤独も、苦痛も、不安も、後悔も…命も!!! 他人が利用していい程安くないんですよ!!」

「せやで遙さん!!!」

月彦に抱き支えられながら、小都華もまた、喉が千切れるほどの声を上げた。
「ウチらを置いてどこ行くんや!! 勝手に悲劇のヒロインぶって、こんなキモいバケモノの言いなりになって…そんなん、ウチが絶対に許さへんで!!」



二人の声に重なるように、緑色の小さな影が波打ち際へと転がり出た。
傷だらけの身体を引きずり、強制回収経路の逆流という激痛に耐え抜いたベタモンだった。

「ハルカァッ!!!」

ベタモンの絶叫が、黒い水面をびりびりと震わせた。
「俺は知ってんだよ!!お前が俺に、ご両親のことや…死んじゃった前の相棒のことを隠してたのな!!」

舟の上の遥が、はっと息を呑み、肩をすくませた。
「お前が俺を見て、別の奴を重ねてんのも分かってた…俺じゃ、あいつらの代わりになれねえってこともな!!!!でも…それでも!!」

ベタモンは緑色の涙をポロポロとこぼしながら、砂を掻き集めた。
「今、お前の隣にいいのは俺だ!!俺はお前と一緒にいてえんだよ!! 勝手にいなくなんじゃねえっ!!」

その愚直で純粋な生者の声が、遥の心を縛っていた呪いの糸を一本、確かに引きちぎった。

遥が舟の上で立ち上がり、手を伸ばそうとする…だが。

『潮が、満ちる』

『戸口が、開く』

海の底から、けたたましいサイレンの音と、ノイズ混じりの祝詞が響き渡った。

遥の意思とは無関係に、葦舟は急激に速度を上げ、霧の立ち込める沖合の儀式場へと吸い込まれていく。伸ばされた遥の手は空を切り、そのまま灰色の霧の中へと消えてしまった。

「…ああ…っ」

小都華はその場にへたり込み、濡れた砂に両手を突いた。

「…行って、もた…。ウチらの声、届かんかった…海を、渡ってもた…。」

悔しさと無力感に、小都華の拳がギリギリと鳴る。

「…まだです。」

月彦が、力強い声で小都華とベタモンに呼びかけた。

「遥さんが最後に立ち上がったのは、僕たちの声に…現世に、確かな未練を残している証拠です。諦めるには早すぎる。」

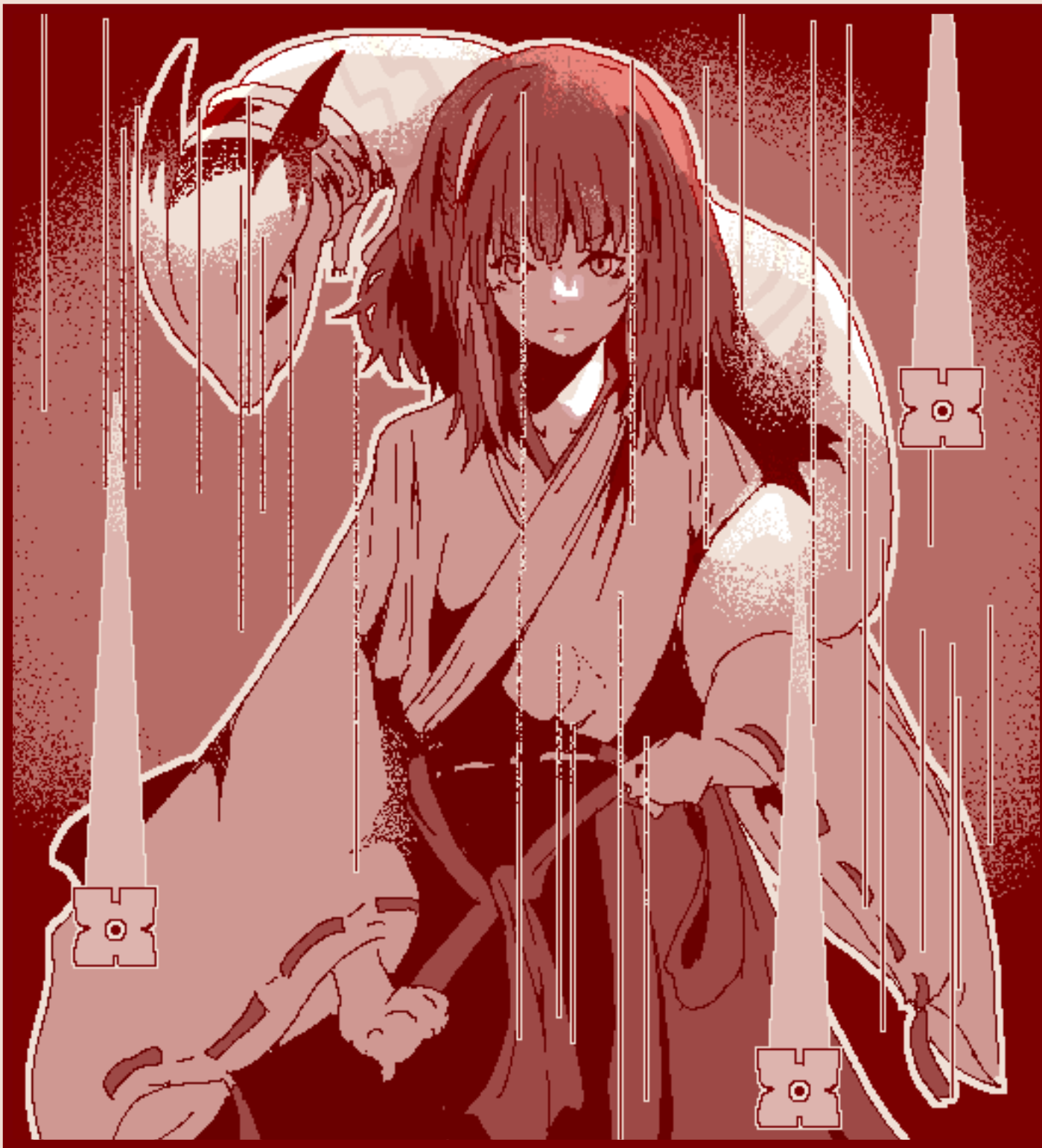
「ふふ…随分と弱気じゃないか、小都ちゃん。」

伽夜子が日傘を肩に掛け、扇子で小都華の顎をくいと持ち上げた。その後ろで、ガイオウモンが二本の剣をクロスさせ、静かに闘気を練り上げている。

「ウチらの声が届かんのなら、届く場所まで無理矢理にでも踏み込むまでさ。そうだろ?」

「ええ。この腐った海の呪い…僕たちで、道をこじ開けましょう。」

僕の知ってる小都華さんはそういうと思いますよ?」



「とはいえ…。」

月彦は視線を落とし、上着一枚羽織っただけの小都華に向けて、僅かに頬を染めながら咳払いをした。

「その前に、服を着てください。風邪を引きますし…色々と、目のやり場に困るので…というか毎回裸ですね…。」

月彦が空間の裂け目に預けていた荷物の中から取り出したのは、神社のアルバイト用の予備の巫女服だった。

「っ!? …ア、アホ!! 見とったんかこのドスケベ!!」

小都華の顔が一瞬にして茹でダコのように真っ赤になり、彼女は上着をギュッと抱き寄せながら月彦のすねを思い切り蹴り飛ばした。

「痛っ!? いや、戦闘中だから仕方なく…!」

「言い訳すな!! 変態! むっつりドスケベ! ばあか! ばあか!」

涙目で怒鳴り散らしながらも、小都華の顔には生きた血色が戻り、先ほどまでの絶望の影はすっかりと払拭されていた。日常の軽口と温度が、彼女の精神を死の淵から引き戻したのだ。

小都華は岩陰に隠れて素早く巫女服に着替えると、緋袴の裾をパンッと叩き、両頬を気合を入れるように張り飛ばした。

「…よっしゃ! 泣き言は終わりや!!」

彼女の足元の影から、クダモンが顔を出す。

「アンタら、好き勝手やった落とし前…キッチリ払わせたるからね!」

「行くで、クダモン! 遥さんを、あの気色悪いのから手からぶち抜くで!!」